



婦人の子と母



第三卷第三號



謹告

本誌は、婦人教育及家庭教育、其他緊要なる各種の問題に關して、讀者相互の質疑應答を掲載す、但讀者の應答なき時は、記者に應ずるものとす。

本誌は一般讀者の寄稿を歓迎す。殊に家庭の日誌、各地に於ける婦人教育幼兒保育の狀態、婦人問題、婦人兒童の遊戲、手毬歌、子歌等に付きては、詳細なる報告を望む。但質疑投稿は、凡べて左の規則によるものとす。

- 一、用紙は、白紙二つ折、字詰は、半枚十行廿二字詰、體は楷書。
- 一、一事項毎に別紙を用ひ、別口に住所氏名を記入せらるべきこと。
- 一、原稿は、一切返附せざることを。
- 一、封書の表には、凡て婦人と子ども投稿と明記せらるべし。
- 一、投稿にして、有益と認めたる時は相當の謝意を表することあるべし。
- 一、照回は往復はがき又は返信用切手封入のこと。

發行 毎月一回五日發行○第一卷第一號明治卅四年一月二十日發行

定價 一册金拾錢○六册前金五拾七錢○拾貳册前金壹圓拾錢○郵稅各一册一錢○切手代用は壹割増但壹錢切手に限る。

入會者 是會則御承知の上にて東京女子高等師範學校附屬幼稚園内フレベル會あて申し込まれるれば雜誌は無代價にて送呈すべし

購讀者 是總べて前金にて東京日本橋區本石町三丁目二十三番地金昌堂へ御注文のこゝ○送金に神田今川橋又は日本橋室町郵便取扱所受取人金昌堂あてのこゝ○見本は切手壹錢に限る○十二枚封入にて申し越されたし○前金相切れ候節は亦にて●印を御姓名の上にて附し候に付早速御送附下されたく御用なき時は御斷り下されたく候○轉居の節は新舊共に御通知を乞ふ

編輯者 是に關する御照會及原稿御寄贈はすべてフレベル會あてのこゝ

廣告料 一頁拾圓。半頁五圓

明治三十六年三月二日印刷
同 年三月五日發行

不許複製

發行兼編輯者 東京市本郷區元町三丁目六十六番地
編輯者 東京市神田區錦町一丁目十九番地
印刷者 東京市神田區錦町三丁目二十五番地
發行所 女子高等師範學校附屬幼稚園内
發售所 東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地
大賣捌所 東京 東京堂●同東海信文合資會社●同北隆館

婦人と子ども第參卷第參號目次

子ども

蛇姫(やまとの翁) ●伊藤畜物語(牧羊譯) ●親猫
と隼鷹(やまとの翁) ●笑草(みず子)

家庭

かげひなた……………松村ひさ子

家庭閑話……………その子

昔いろは料理……………石井泰次郎

洗濯水と香水の製法……………平岩學洋

富士ちゃんの日記……………會員某女

學術

幼兒の聽覺……………松本孝次郎

小笠原父島の二見港……………やて

史傳

エドワード、デロンゲ(完結)……………米溪

文苑

春風春水……………雨峯生

新體詩學び卒へし友の許に……………平野ゆき子

みやげの劔……………つねを

雛のわかれ……………東くめ子

折にふれて……………和歌子

説林

歐米の家庭教育及幼稚園保育……………下田次郎

視察談……………牧羊生

讀書につきて……………牧羊生

雜錄

幼稚園保育要項……………女子高等師範學校附屬幼稚園

三月をやよひといへること……………せく生

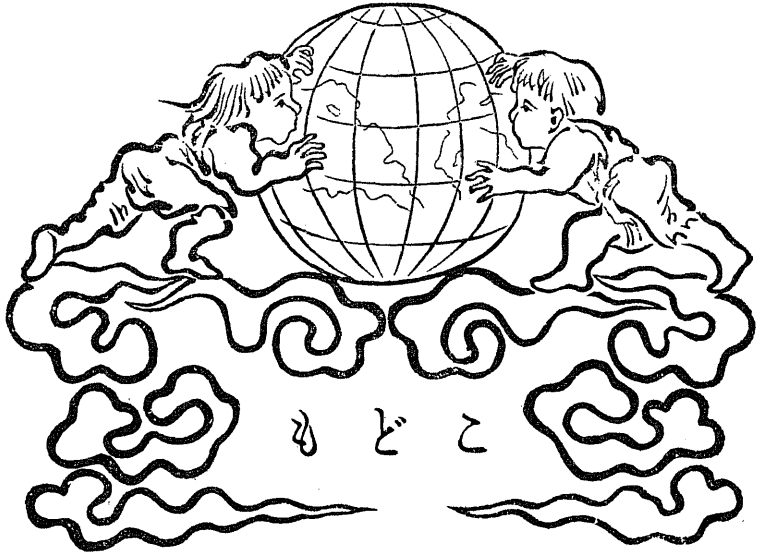
歸省日記……………小林雨峯

キングストリート幼稚園：在米國伊藤せい……………い

彙報

女子高等師範學校 ●各學校の開始と入學生徒募集 ●大日本割烹學會 ●新潟縣女子師範學校 ●留學生歸朝 ●府下瀧の川の康樂園 ●相摸通信 ●北海道通信 ●禁酒學校 ●會報

もど子と人婦
號參第卷參第



蛇ひ姫め

やまとの翁

さて、いろ／＼とお話を
 してきましたが、こんどわ
 一っロシアの昔話むかしばなしとゆーの
 をして見ましょー。

ロシアの、ある田舎いなかに一
 人の大百姓おほひやくしやうが居まりましたが
 澤山たごさんな雇人やとにんの中に、釜藏かまぞうと
 ゆーのがありました。至極しごく

正直な者でありましたが、平生他の雇人とは、決して、交際を
 しません、で、何日でも一人ぼっちです。そこで、他の雇人ど
 もわ、いろくつと一所に、遊ぶよーに、さそって見ましても、
 中々聞きませせん、いつの間にか、ずーっと抜けて行って、野だ
 の山だのえ行って、獨りで遊んで居ます。

ある日のこと、釜藏わ、休みの時間になつてから、いつもの
 様に、一人っぼちで、ぶーらくと山の方え出掛けました。だ
 んくと、行って、も一人の家などから、よっぽど遠い山の方
 まで行きました、ひょいと見た所が、夫わく大きな一匹の蛇
 が、ぐるぐつと身体を巻いて、恐ろしい鎌首をもちあげて、
 ぺろっぺろつと赤い舌を出して、おまけに恐い目附きをして、

釜藏の方を向きながら、申します。

『己は今直、お前さんを呑もーと思う所なんだ』

けれども釜藏わ、平生から山路の寂しさに馴れきって居ますから、少しも恐れません。夫で、其蛇に向って答えました。

『さーく呑もーと思うんなら、どーか呑んで下さい』
すると、蛇わ、一寸考えて

『いーや、呑むのわ、止そーよ、其代り己のゆー通りのことをやらなくっちゃ可けない』といーながら、釜藏のする事を申します『さー、これから、直家え歸って見なさい、屹度、主人が、お前さんが、あまり永く遊んで居たとゆーので、怒って居るに違ない。なぜかとゆーに、畑に乾した稻を誰も取り片つける人

が居ないのだから、だから、お前さん歸つたら、すぐ夫を片附
 けに行けとゆーたら、其時已わ、お前さんの手傳をしてやる
 のだから、其稻を一度に、車に積み込んで仕舞うのだよ、但し
 一把だけは残して置いて、賃金の代りに主人から、夫を頂く事
 にしなさい。決して錢で貰つてわ、行けない。そこで、夫を頂
 いたら、畑の中で、夫を燃すとゆーと、其畑の中から、美しい
 お姫様が出て来るから、其お姫様を、お嫁さんに貰うのだよ』
 そーいって置いて、蛇わ、のさくと草の茂みえ這入って仕
 舞いました。釜藏は、不思議に思いました、夫から、家え歸
 って見ると、蛇の言つたよーに、主人わ大變怒って、すぐ畑え
 行って、稻を取り片附けろと申しますので、畑え行って、其仕

事にとりかゝつた所が、さう其仕事の速い事といったらぬ位、瞬く中に車に一杯積み込んでしまった。そして、主人の所に歸つて庫の中え片つけましたが、主人から決して錢を貰をいとわしない。たゞ畑に残った、一把の小さい稲束を欲しいといつて、願いました。そこで主人から、其束を頂いたもんですから早速蛇にいで付かされた様に、畑の中で、夫を燃やした所が、不思議にも其畑の中から、夫わく奇麗な、美しいお姫様が一人ふわーつと出て來ました。釜藏も、之にわ吃驚しましたが、何しろ美しいお姫様だから、すぐと婚禮をして、お嫁さんにしました。

そこで、今度わ、夫婦の住む家を立てなければならぬとゆー

騒さわぎになりましたが、主人しゅじんわ、釜藏かまぞうの忠義ちゆいぎの褒美ほびに、廣ひろい地面ぢめんをくれましたので、早速さつそく普請ふしんにとりかゝると、釜藏かまぞうのお嫁よめさんわ、もー一生しゆくせん懸命けんめいで手傳てづかいをする。夫それで釜藏かまぞうわ、大方きりかた自分で働はたらかない中に、もー立派りつぱな家うちができてしまった。道具どうぐなどもちやーんと、揃そろって出來できて居いる。釜藏かまぞうわ、どーも不思議ふしぎで堪たまらない。たゞもー、そこいらを歩あるき回まわってわ、出で來き上あがった家うちを眺ながめて居いる許ばかり、何なにかほしいなと思おもうと、ちやんと出で來きて、使つかうよいになつて居いる。村中むらぢゆうで、釜藏かまぞうの家うちほど立派りつぱなのわ、一軒いっけんもない。

こーゆー風かぜで、釜藏かまぞうの家うちわ、だんくかねと金持かねちになつてきま

* * * * *



したが、ある日のこと、他所から、歸つて來た所が、雇人の申
 八
 しますにわ、

『旦那さま、も一稻わ、すっかり實が入つて居りますに、一つ
 も取り入れてありませぬよ』

釜藏わ、此時分、ちよーど三十町ほどの畑を持って居ました
 が、今が稻の取り入れ時であつて、お嫁さんが折角働きわ、働
 いたのだが、まだ澤山畑に残つて居たのです。

そこで、釜藏わ、雇人のゆーことを聞いて『一体何のこつた』
 と思ひましたが、忽ち怒り出して、大聲で罵り出した。『ハ、一
 そーだ。どーせ、一度蛇だつたんだもの。蛇だけの事しか出來
 ないのだ』

何でも、おかみさんが、働かなかったからだとゆーので、大變に怒り出して、すぐ家の中へ駆け入って見た所が、中にはお嫁さんの影も形も見えない。よくよく見た所が、さー大變、寢間の所に、大きな大きな、一匹の蛇が、ぐるぐると、身体を巻いて、鎌首をもち上げて居る。釜藏わ、ハッと思つて、忽ち思い出したのわ、最初、お嫁さんが『決してく妾に、蛇とゆー言葉を聞かして下さるな、若し蛇とゆーことを言つたら妾しわもーこゝに居られないのだから』といったことである。釜藏わ、今夫を思い出したのだが、もー遅かった。言つて仕舞つたことわ、取り返す譯にわ行かない。そこで、だんくと考えて見ますと、いかに、いーお嫁さんだった、親切である

し、よく働いてわくれるし、數知れぬ善い事をして呉れた此お
 嫁さんを、たった一言、自分が約束を守らなかつた爲に、も一
 取り返しの附かぬことにしてしまつたとわ、何とゆ一情ない事
 だらう、などよ、思うと、も一堪らなくなつて思わずハラハ
 ラッと涙を流して泣きだしました。

すると、其蛇がいゝますにわ、『あ一夫程私しを思つて下さる
 のですか、けれども出來て仕舞つたことは、も一仕方がありま
 せぬから、ど一か泣かずに居て下さい。さっきお怒りになつた
 のわ、あの畑の稻のことでしよ、けれども、庫え行つてごら
 ん、も一ちやんと取り入れて、あなたの爲に、みんな白で搗い
 て置きました。あゝ、只今から、も一お別れしなければなりま

せん』といつてぞろ／＼と這つて行きます。

釜藏かまぞうわも、悲かなしくつて悲かなしくつて仕し様さまがないから、蛇へびの這はつて行く方かたえ行く方かたえと、附ついて行いきます。丁度ちやうど死しんだ人びとのお葬まうらいにでも行く様ように泣ないて／＼泣なきくづれて、ついで行いきますと、と／＼前まへに蛇へびに遭あつた、奥山おくやまえ行いきました。さて、大おほきな木の茂しげつた所ところまで行いきますと、蛇へびが留とまつて又またくる／＼と身体からだを巻まいて、鎌首かまくびを立て／＼います。

『せめて、今迄いままで私わたしを大だい事じにしてくれた恩返おんがへしを致いたしたいと思おもいますから、ど／＼か一いち度ど、私わたしの頭あたまを撫なで／＼下ください』とい／＼しますので、釜藏かまぞうわ、涙片手なみだかたてに、蛇へびの頭あたまを撫なで／＼やりますと、『さ、あなたのお心持こころもちわ、ど／＼にかなりましたか』と問といます。釜藏かまぞう

わ、『今お前の頭を撫でるとすぐ、私わ、世界中の事わ、何でも分る様に思われて来た』と答える。すると蛇わ、も一度頭を撫でゝくれといって、又撫でゝやると、『今度わ どーなりました』と聞く、釜藏わ『今度わ 世界中の人の言ふ事がみんなよく分る様に思われて来た』と答える。そこで蛇わ、『も一度撫でゝ下さい、これがお仕舞いだから』とゆーので 釜藏わ お仕舞に撫でゝやると、『今度わ どうになりました』と聞く、釜藏わ『地面の下の事が、すっかり分る様に思われる』といーましたそこで、蛇の申しますにわ、『夫なら、今から天子様の所えお出でなさい。屹度天子様わ、あなたが物知りだとゆーので、私の代りにお姫様をくれます。けども、どーか私をお忘れな

で、私の爲に神様に祈って下さい。私わこれから、いつまでも蛇で居なければなりません』と行って、とーく藪の中へ這入って仕舞いました。けれども釜藏わ、夫から天子様のお姫様を貰って、お仕舞まで、幸福でしたとさ。



めでたしく。

●伊蘇普物語

牧 羊 譯

其四 狼と鶴

或時狼が喉に骨をたてたもんだから、大變な
 お賃をあげるといふ約束で、一
 羽の鶴を雇うて来て、其長い嘴
 をつっこんで、骨を取り出して
 貰うことにしました、所が、鶴
 が、骨を抜き取ってしまつてか
 ら、「さーお約束のお賃は」といっ
 て請求しますと、狼は、さも悪
 くしく齒をむき出して「オヤ、何
 だと、馬鹿なことをいふ鶴だな、お前、狼の口と
 唇とから、自分の首を無難に引き出すことの出来



たのが、夫でも一大變なお賃になつてゐるじゃないか
 其上のお賃などは、あんまり虫がよすぎるぜ』

悪漢の爲に盡した時に、報酬を望むは愚なり、
 害を免れたならば、夫だけでありがたいと思へ。

其五 父と子ども

一人のお父さんが、幾人かの
 子供を持って居ましたが、常に
 喧嘩ばかりして、仕様があまり
 せん。お父さんが、どの位骨を
 折つても其喧嘩が己みません所
 からして、何か宜いお手本で、
 兄弟喧嘩のよくないことを知ら
 せてやらうと考へまして、或日のこと、兄弟の子
 供等に、めい／＼一本づゝの杖を持って來させま

した。そこで、お父っあんは、其一本づゝの杖を一束にして、渡して各自順番に、夫をへし折って見よと命じますと、誰も彼れも、力一杯にやって見たが、一人も之を折る者が無い。次に其束をといて、元の通り一本づゝにして、各自に渡して折らせて見ると、皆が苦もなく折って仕舞ひました。

そこで、お父っあんが申しますには『さー、みんなよくおきゝなさい。お前方兄弟、皆心を一つにしてお互に助け合ふものなら、丁度此杖の束の様に、敵から負けることはない、然し喧嘩をして、互にバラ／＼になると、この杖の通り、譯もなく折られて仕舞ふものだぞ』

其六 蝙蝠と蝮鼠

ある時蝙蝠が地面へ落つて、蝮鼠につかまへられましたから、一生懸命に助けて呉れると願

ひますと、蝮鼠は一切鳥類とは敵同志だから、許すことは出来ないといつて、どうしても聞きませんそこで蝙蝠は、決して鳥ではない、鼠の類だといつて、やゝと助けて貰ひました。夫から暫らくしてこの蝙蝠が、二度目地面に落つて、今度は他の蝮鼠に捕へられました。で、前と同じ様に、命を助けてくれと願ひますと、其蝮鼠は、鼠とは特別仲間が悪いから、助けてはやれないと申します。そこで蝙蝠は、決して鼠ではない、たゞ蝙蝠だといつて、二度目助かりました。

機に臨んで、事を處する人は賢い

其七 鶏と寶石

一羽の雄鶏が、自分だの雌鶏の爲に、餌をあさつて居た所が、不圖、立派な寶石を發見しました

そこで、雄鷄が寶石に申しますには、『お前さんを拾ったのが、私でなくて、遺し主だったなら、夫こそすぐお前さんを拾ひ上げて、どれ程大事にするかも知れないに、不幸にして、私は お前さんを拾った所が、何も目的はない。夫よか、粟粒一粒でも見附けた方が餘程、私しの爲には宜かった。』

其八 燕と烏

燕と烏とが、どちが羽が美しいかといふので、喧嘩をして、果てもない。そこで、烏がとう／＼次の様にいつて、お仕舞にしました。『君の羽毛は、なる程美しいが、夫は春だけのことだ、而し僕のは冬になると、大變暖にしてくれるからな』

其九 獅子王

野山の獸どもが、獸界の王として獅子を戴くことになりましたが、此獅子はなる程王者の徳を具

備へて居つて、壓制だの殘酷などは少しもしませんでした。そこで、其獅子はだん／＼と政治を施いて居ましたが、或時其領分の鳥や獸の大集會を開きまして、森の平和の爲に、鳥獸界の大同盟を作ることを宣告しました。此同盟では、狼も仔羊も、豹も仔山羊も、虎も鹿も、犬も兎も、一切協同の生活をして、永遠の平和を保つて行かねばならぬといふのであります。夫を聞いて、兎は手を拍つて喜びました。『オー これで、どんなに弱い者も、強い者の側に心配なしに、一所に居られるのだ、我輩は、どんなに永く、此同盟の出来るのを待つて居つたか知れない』

其十 主人と犬と

主人が今旅立に出やうとすると、門の前に犬が脚を踏んばつて立つて居るので『オヤ／＼ 此奴何

を欲しがって立って居るのか、もーす。かり用意が出来て居るに、貴様ばかりだ、さー、直ぐとお供をして来い』犬は尾を掉りながら答へました『なに、旦那様、私しは 疾っくの昔用意が出来てこゝで、旦那を待つて居る所なんですよ』

愚圖々々する人は、さまつて、自分よりも さつ
 さとする人の事を 愚圖だといひます。

親猫と隼鷹

やまとの翁

三年飼つてやつても、三日しか恩を覚えて居ない
 とか、飼つてやるなら年季を定めて飼つてやる
 か、猫のことは頓と善くいふ人が少いですが、猫

だつて、どーして、中々可愛いものです。

先づ、猫か朋輩のカナリヤを助けたお話は、誰でも知つて居ませう。夫から猫が子供を可愛がる事といつたら、また中々甚いものです、

アメリカのある處に、一匹の牝猫が澤山な子猫を一所にして、日當りの直い椽側で、種々に戯けさせて遊ばせて居りました。大きな三毛の親猫が平たくなって、さも心地善さ相に、仰向けになつて四足を伸ばして寝て居ると、可愛い可愛い子猫が二匹許り、チヨコ〜ッと驅けて來ては親猫の長い尾の尖をつかまへて、上になつたり下になつたりして喜んで居る、すると残りの二三匹が、また其子猫の足を噛えたり、両手でつかんで立ち上つて見れば轉んだりして、何かなしに戯けて遊んで居ました。

所が其處へ以て、一羽の隼鷹が丸で電光の様な速さで空から舞ひ下つて來たかと思ふと、突然、何も知らずに遊んで居た子猫の一匹を引っかけて、再び虚空遙かに舞ひ上らうとしました。今まで一心に子猫を遊ばせて居た親猫は一目見るから、すわこそ我子の一大事よと、今飛びかけた隼鷹目がけて、奮然と跳び付いた。

隼鷹も此勢ひに吃驚して、折角捕つた子猫を捨て、更に自分の防禦に取りかへりました。さて此戦争は中々激しかった。どしどし隼鷹の方で見ると種々な武器を持つて居る、其方の強い羽翼で以て無暗に猫の顔をたゞ付けて、鷹口の様な爪と嘴とで切りに攻撃するもんですから可愛相に、親猫は散々に苦しめられて、終々左りの目を一っくり抜かれました。

けれども猫も、子を思ふ一心から、中々此強敵に負けては居ない、此甚い痛手にも屈せず、流れる血を物ともせず彼方此方へ駆け廻り、駆け廻り、噛み切りました。夫から尙暫らくは上になり下になり、取つたり組んだりして大方半分許りも戦つても、何方も大弱りに弱つた時分、親猫は不意に一息ウンと方を入れて、噛み附いてやつとの事で敵を足の下に組み敷いて、丸で勇士が戦場が一番首でも上げたかの様に、鷹の首を噛み切つて仕舞ひました。

それから直に、子猫の側へ走つて行つて、隼鷹の爪で引っかかれた、可愛い自分の子の傷を一生懸命に甜めて居る、自分はどうかといへば、片一方の眼はくりぬかれて、顔中丸で血だらけになつて

居るに、其痛手には一向頓着して居ない。切りと子猫の傷を甜めては、残りの子猫どもを遊ばせて居る、子猫どもは、親猫がこれほどの危い目に出遭つた事などは、少しも知らないで、相變らず親猫の尾を捕たり、ぶら下つたりして可愛い顔して遊んで居ました。

◎ 笑 草

み ず 子

○田舎者 或る田舎者が郵便局に行きまして、手紙を發送としますと、「此れは目方が重過るから今一枚印紙を貼らなくつてはいきませせん」とゆはれたので、眼を圓くし口を開いて驚げた様子でゆーには「ハア、印紙を貼れば目方が軽くなるんで

すけー!』。

○看護婦の頓智 「先生! 只今妙な病人が参りまして、大層苦がつて居ります、早く行つて診察をやつて下さい」如何したのだ? 「インキを飲んだので御座いますと」其の病人をどーして置いた? 「一時凌に吸取紙を二枚飲まして置きました」
「其では此方に行くには及ばす」。

○滑稽な答 某小學校の先生が或る時生徒に向ひ物は熱を受ければ膨脹れ、寒に遇へば收縮るとゆー事は解りましたか。解つた人は手を舉げて! とゆいますと、一人の生徒が頻りに手を高く舉げますから、先生は「例を擧げて御覽なさい」と問いますと、其の生徒は起立して、「夏は日がのび、冬は日がちいまるじやーありませんか」と答へました。

○埋る許り、「お前私しが今ま 死んだら如何しますか？」と夫が其の妻に問ひますと、妻君は平氣な顔で、「唯だ穴を掘つて埋る許りですよ、」と答へました。

○頓智 甲「君、君はどーして左様に一生懸命體操なんかしているんだ？ ヨセ、體操なんかで飯が食るもんか」 乙「其でも僕は體操すると二三杯餘計食いるよ」

○柿本人丸 甲「僕は昨夕柿本の人丸に遇つたよ、乙「今頃柿本人丸が居るものか」甲「だつて僕は昨夕家へ歸る途中、柿の木の下に人の丸くなつて居たのを見たもの」

福引

(一)正月元日 天地を拜しかみを飾る(リボン)

(二)馬のお尻 バケツ
(三)五問題出て落弟 三枝の禮(三四の零)あり (鳩)

(四)試験後の休み 苦痛濟(靴墨)
(五)不消化物 ようかんでお上り(羊羔一本)

問題

吳市 一狂生

(一)一村の利益の爲に開く會議を損(村)會といふは如何？
(二)越後に在る河を支那の(信濃)川といふは如何？

家庭



かげひなた

ひな子

心にも言にも行にもかげひなたがなく正直で、
 人が知つて居ろうと居るまいと、見て居ろうと居
 るまいと、そんな事にはかゝはらずに、正しい事
 善い事を何時も心に考へ且つ之を實行する、悪い
 事はすこしもせぬといふ事は、誠にうるはしい事
 であつて、そうして人は皆かくあるべき當然の事
 であるのは、今更之に述べ立つる必要もござい

ませんが、果して此正しい自然の通りにいつて居
 りませうか。大きく言へば社會、小さく考へて家
 庭、もつと細かい處で個人々々に、かげもひなた
 もなく、それが皆正直でありましたならば、どん
 なに罪惡といふもの、數が減りませうか。どんな
 にもつと清らかになるでございませうか。尤も一
 方には「うちの下女はかげひなたなくよく働く」
 と喜ぶ人もあれば、一方には「うちの子はどうも
 偽を言ふが困つたものどうしたらかげひなたのな
 い子になるのであるかと」嘆息する人もある。又
 人の知らぬ間に物を盗んで行く悪人もあれば、陰
 徳を施す善人もある千態万狀の此世の中ですから
 決して一概には申されませんが、とにかく此世に
 はかげひなたがある、かげであるい事をするとい
 ふ不正直ないまはしい分子がまじつて居るので、

之が清淨無垢であるべき幼児にまで及んで居るのは、實に悲むべき事でございます。

天真爛漫のうるはしい性質が一點も害はれず、スラ／＼と無邪氣に發達した子がありましたならば、そうして其子がまだ幼稚で大人の社會の不正直な事も世にかけひなたがあるといふ事も知りませんでしたならば、其子には様々の良い處がありませうが、當然、正直で一點のかざりけもなく無論僞もなく、即ち正直といふ點では申分のない子であるべき筈であります。ところが實際をういかぬ幼児が澤山あります。西も東もまだ知らぬ可憐の幼児であつて已にかけとひなたの別を知り其行をちがへるものがありますのは情ない話であります。そうして之等は決して其幼児自身が「自分是不正直な子にならう」といふ意志をもつてな

つたものではありません。意志のよく發達して居らない幼児を已に不正直にしたのは、實に父母なり何なり其他之を育て訓へ導くものゝ責任であります。よし又不正直に陥るといふほどに悪い方に進んで居らないまでも、少くとも天真爛漫でない何だかシラ、かけとひなたで行がちがふといふ無邪氣でない幼児は中々多くあるので、之等もやはり大人に責任が歸するといふ事にかはりはございません。

幼児同志の悪い感化を受けて其爲に、無邪氣な良い子がいつのまにか、かけひなたを覺えたと思へば、之は無論はじめから悪かつた子のおかげではありますか、併しそういう悪感化を受ける境遇に良い子を置いておいた大人がわるい。とにかく大人が全責任を負はなければならぬと思ひます。

ところが其大人、之がまた決して「かげひなたある兒になれ」と望むものではございませぬ。「良い兒になれ」と願はぬ人が何處にございませうか。此様に幼兒自身も、また其周圍にある大人も決して望んで居らぬのに、實際かげひなたある兒が割合に多いのはどうしてでございませうか。

幼兒がかげひなたをするに至る原因はさまざまでございます。心のまだ軟弱な、しかも摸倣力の盛な時代に悪友のするのを見て之を覚え、一回は一回と其便利(?)を知つて、遂に慣習、性ととなり、初にはつひ、したものが遂には故意にかげとひなたを作るに至るものでございませう。又あまり大人からさびしく干渉され、一から十までこまかく命令され禁止され、一言一行見のがすまじと見張て居らるゝために、其間の窮屈さ不愉快さの反動

として、其人の見て居らぬところでは、急にヤレ〜と足も腰も伸びた氣になり、前には據なく縮んで居つたものが、打て變つて其人のかねて禁じて居る事もする、命ぜられた事はしない、といふ風な自然にできる裏表が、つもり〜て とう〜自分で故意に、其大人の目を放れた時なり場處なりをつくるといふやうに進むのもございませう。又は一寸した事を冷かに大業に叱られたおそろしさに、其次からは、ふと其事を再びしても故意に之を隠す偽るといふやうな事からはじまるのもございませう。之等は其事柄が已にかげひなたのある事なのですが、こういう事が重なる、つまり「かげひなたのある兒」となるのでございませぬ。そうしてまた一つ、甚だ有力な原因となるおそるべき事柄がございませぬ。即ち、家庭に於け

る家族相互のつまらぬかくしあひ、かげひなた、
及大人が何心なく幼児につきこむ秘密がそれでございます。

「之は阿父さんには秘密」之は阿母さんに秘密」
「之はお祖母さんに申すな」といふ風なつまらぬ秘密のある、家族間にへだてのあるおもしろくない家庭がもしございましたならば、邪推、怨恨、其他感情の衝突がはじまつて、其家庭の幼児は無論いろ／＼の悪影響を受けませうが、殊に日々大人がかげひなたをして見せる事になるのでありますから、幼児にとつて此方面にどれだけ害があるか知れませぬ。幼児だから何も知るまいと思つてる間にチャント其軟かい脳に自然に深く印象して居るので、まして大きくなり發達するに従つて自ら觀察する力も増して行くのでありますから、家族

相互に此點に深く注意して、まづおもしろくもない秘密を家庭外に透ひ出し、相互に信じあつて眞に奥底のないやうになりましたならば、家庭の愉快になる事はもとより、そういふ美はしい良い家庭には様々の美德が生れ出て、家内中かげもひなたもなくたのしく暮す事になり、其子女は温かに感化の泉の中に成長するでございませう。それから家族の一部を成して居る僕婢、之も輕からぬ影響を其家庭の子女に及ぼすのは勿論で、もし主人の見て居ると居らぬで言行がちがふやうな者でしたならば、どんなに子女の爲にならぬ事が多いか知れませぬ。要するに私は、まだ無垢な幼児の側から考へて、一家内のつまらぬ秘密を除く事の必要を深く感するのでございませぬ。

又「此おもしろやを誰サンが見るとはしがるから

しまつて置きなさい」「今日バナラマを見せて上げた事は歸つても兄さんに言はずに置きなさい」など、いふ事は一寸罪のないやうに考へられて、つひ言ふ事もあるか知れませんが、其實なか／＼罪があるので、こういふ考が万事に及ぶと、やはり無意に秘密といふ事を幼児に注ぎ込む場合が多く、従てかげひなたのもとになる事が多くございませす。

かげひなたはおそるべき不正直の源ともなる事を知つた以上、幼児に一點でもさういふ事のないやうに、感化を興へ訓へ導いて、天真爛漫な無邪氣な、正しい善い事は何時如何なる處でもする、悪い事は何時如何なる處でもしないといふかげひなたのない、正直な兒にしたいものでございませす。

家庭閑話

そのの子

▲出産の報知に接して『男のお子さんでしたか』との挨拶は禁句なり。必らず『お嬢さんでしたか』と問ふべきにこそと、さる老巧の人の語らるゝを聞きぬ。生れたる子若し女なりしならんには、左なきだに失望せる人の口より『どいも女の兒でして』と挨拶せしむることの、いと氣の毒に覺ゆべきに、後の間に對してならんには、生みたる人も左程には思はざるべく、若し男の兒ならんには『イ、ヤ男でした』と元氣よく答へらるべければなりとのことなり。

▲あはれ女はどつちらなきものはあらず、まさか木のはしの様にいはるゝにはあられねど、現在生む母親すら、男の兒をと希ふめり。

▲さればとて、世に女なからましかば、男一人にて如何にかあらまし、人には女の子生れよ、吾は男の子をなど願ふは、さても人の心の勝手なるものよ。

▲子の可愛さになれて、いつまでも乳を巳むることの思ひ切りがたき母親こそ、いと心得ね。

一通りの教育を受けたる人にありてはことさら。

一年を経て幼児に齒の生るは、もはや哺乳の必要

なしとの自然の指教とこそ聞きつるに、誕生過ぎ

て尚乳もて育つること、母子共に害を受くる覺悟

ならんには、儲も是非なしとやいはん。

▲子供を添寝させることも厭したきことにこそあれ。

乳房もて呼吸をとめ、窒息せしむる實例は、

日々の新聞紙に絶えずかゝげらるゝにあらざるや。

▲女中を使ふは心すべきことなり。下婢に對する

秘訣は奉公人とせず、家族の一人として、面倒を見てやるべきなり。奉公人あしらひにする時は所謂奉公人根性を出して、なかく使ひにくゝなるなれども、家族として對入時は、眞實家の爲を思うて働くに至るものなり。

▲一般に家庭のことは、内部的に屬す、されば妻

にして、夫の事を他に訴へ、夫にして妻に對する

不平を他に泄らし、若しくは兄弟互に他に向つて

相識るが如きことは、許すべからざることなり

と或書に記されぬ。

▲無邪氣なるが愛らしとて、二十才にも足らぬう

ら若き少女を娶る男こそ、いと心得がたけれ、さ

るは妻を器具と同じく見んとする謬見なりかし。

一月二月の程こそはよけれ、遂には、何事にも氣

の利かぬに業を煮やすに至るべし。

▲女學生上りの奥様の、兎角非難せらるゝは常識に缺けたる節の多きことなり。かにかくと常規づくめの書物の上にかゝつらいて、理屈のみは振り回せど、もとゝ書物といふは、大凡の場合を記せるに止まれば、實際世の中に出で、は、書物以外のことは、幾らも出で来るなり。學校生活をなさぬ人は、いろゝと年長者につきてそを経験すれど、學校生活にのみ心を傾けたる人は、その經驗なきため、極めて通常の考に通ぜずして、さまゝの可笑しき振舞に陥るなり。

▲似た者夫婦といふことあり。これは似た者が互に夫婦になるといふにはあらで、似た者が夫婦で居るといふことなり。詳にいへば、始は似ざりし男女の、夫婦になりて後互に、其嗜好、其性癖等の相似よることをいふなり。これでこそ、夫婦

は異體出身ともいはれぬ。もし似ぬもの夫婦にてもあらんには、其夫婦こそは、まことに融和といふものを得たるものとはいはれじ。相互の感化といふこと、これ實に夫婦間の要素とぞいふべき。

今昔いろは料理

石井泰次郎

(一七)

◎小板玉子の拵方

これは小板かまぼことて、小さき細き板にかまぼこをつくる形に似たるゆゑに小板とはいふなり、玉子を煮ぬき玉子にして、からを去りて、二つに堅に切て黃身を取り出して、其あとへ、山椒みそなどねりたるを入れて、小板につけてあぶりて出すなり、

小板はすぎの木にて細く玉子をのするほどにして
羽子板の如くもつ所をはそくしてかくべし

◎紅白うちもの拵方

三盃砂糖 百匁に極上みぢん粉 六十匁のわりに
て砂糖と粉とまぜ合せて、茶碗などへかたくつめ
て、打かへし出すべし、砂糖へ水のしめりたけま
ぜあきて粉と合せて形に入るべし、紅は色よきは
どに砂糖にまぜあきて、後に粉と合すべし、べに
は細工紅の生上味といふを用ふべし、ピンヅメの
食用紅は用ふべからず、

洗濯水と香水の製法

在相州腰越 平岩學洋

私は皆さんに洋風洗濯水及香水の製法を御紹介
致しますせう、此れは私の家庭で實行してゐるので

あります、此の製法は至て便利で、又買った物に
比べると餘程優ております、皆さん試にやつてご
らんなさい。洋風洗濯水製法、此れは西洋で盛に
製するのであります、恰も我が國の洗粉等製す
るのと同じであります、此の製法は専らあくどわ
ぶらとを混じて製しました尋常白石鹼五十六匁と
炭酸曹達六十四匁、蒸留水（或は雨水を以て代用
す）三升六合、テレメン油清十六匁とをよくまぜ
て、之れを火にあげ、しづかにかきませ、凡そ十
五分間程沸騰せしめ、其の後便宜の入れ物に移し
入れて貯ふのであります。之れを一時に澤山こし
らへてあきまするには、右の割合に調合すれば宜
しいのであります、其のこしらへた水は使用の際、
適宜の水に和して衣服を洗ふのであります。（用法
は凡一升六七合の水、若しくは湯の中に洗濯水一

合五勺位を投入して物品を洗ふのであります)

顔用香水製造法、此の製法は苦扁桃水三十匁と、薔薇水百二十匁と、蜂蜜十四匁と、蒸餾水四十匁とをよく混ぜ合せまして、瓶に入れ、密栓して貯へておくのであります。此の香水は専ら顔面の様な所へ塗るに適しております、殊ににきびをなかし、面部を軟かにし、且つきめをこまかにするに特効あります。又其の香氣頗る佳良であります、使用の際はよく瓶を振つて用ゆるのであります。

富士ちゃん日記

(明治三十四年十一月生)

會員 某 女

明治三十五年八月七日 昨夜は十時頃までも起きて居り、又今朝は五時頃から目をさましたから、

餘程よくひるねをする筈であるに、あまり暑さためか、少しもねず終日機嫌わるし夕方湯をつかひ、それから漸く眠りたり。

八月八日 始めて器具のガラ／＼を廻すことを覺え、ヤー／＼と言ひながら、切りに喜びて遊ぶ夕方取父ちゃんに、肩車をして貰ひ、あまり喜しさに、ケラ／＼笑ひながら、頭をふつて額を打ち、瘤一つ出来た、しかしそれも平氣でした
八月九日 正午十二時のうつを聞き、其時計を取らんとして大騒をなし、終には持前の疝癩を起して、泣き出したり。

八月十日 始めてチョーチ／＼が出来た。又アバ……も二三日前迄は口に手を當て、口でアバ……と言ふて居たのが、今日はホントに手を動してアバ……が出来た

八月十一日 今日は雨ふりて、外へ出られず機嫌わるし、仕方なしに車に乗せて庭を引廻す、終には格子戸のリンに紐をつけて、それを車の中から引きて、其チリンチリンと音のするを喜び漸く機嫌を取つた

八月十二日 三時頃叔父ちやんに抱かれ、劍舞指南所の前を通りかゝると、其内で「忽チ驚ク大蛇ノ道ニ横ハルヲ」と大きな聲で吟じたが、それに驚いて、大變な大聲で泣き出した。

此頃は誰かに抱かれると、すぐエイ〜と言ふ、これはヨイヨイと言ふ事なれども、エイ〜と言ふり言はれぬと見ゆ

祖母ちやんと言ふ事をエーチャンと言ふ、音は變れど節は殆んどおなじ様に出來た。

八月十三日 他人が笑ふと自分は可笑しくなくと

も、エ〜と言ふて笑ふまねをなす。

八月十四日 下齒が又一本出た、是で七本目。

母ちやんが、コッ〜と、せきをしたら、早や富士ちやんがマチをして、コー〜と、咽喉を鳴らす、

しかしこんな、マチをしては、よくないと言ふてなる文言はさぬ様にしてやめさせた。

八月十六日 誰よりも、一番さきに起きて、一人で遊び居つたが、何時の間にか、床の間に這ひ上、掛物をなで廻はし、下の方を、少しく汚した。

何時も、牛乳を茶碗で飲まして貰ふに、今日は始めて自分で兩方の手で、其茶碗を持ちて、あまりこぼしもせず飲だ、其手つき何となく可愛らしかつた。

アバタのある屑屋が來たら、ドー云ふ譯か、それに抱れたがりて、泣き出したれば仕方なし、屑屋に抱て貰つた、處が大變に喜びて、少しもおろしませんでした。

せんでした。



幼兒の聽覺

松本孝次郎

聽覺は兒の胎内に在る間はなき筈である。即ち空氣の振動が未だ耳内に入らず、刺戟するものがない爲にきこえぬ筈である。生れて後直にも、眞にきこえず、之は生理的聽覺器十分に整はず、かつ鼓膜内にある空氣の分量少なく、鼓膜の振動不十分な爲である。赤兒でも強い音のした時に身を振はせるが、之はきこえたのでなく、音の振動が皮膚に觸れた爲である。さて追々發育すると左右耳共よくきこえるやうになつてゆく。左右の耳が

あるのは眼に左右あると同しく一方でもよいのであるが、二ある方が便利なのである。即ち音の方向を判断するにはたしかに二ある方が便利で、左方の事は左耳で右方は右耳でよく定めるのである。しかし目の助がなければ、十分音の方向を定めることはできない。其證據には目かくしあそびをする時に、大に音の方向をあやまるものが多い。一体耳は知識と愉快と兩方の機關になる大切なものである。

耳は外部から見ると耳殻が不用のやうに思はれるが、幼兒にとりて大に必要なのである。耳殻に異状あるものは屢々精神的にも異状がある。例へば大きすぎるもの、小さすぎるもの、左右の大きさがちがふものの如き、屢々精神的欠損を有て居る。そこで耳殻をば精神的作用をあらはすものと

して、外行から觀察することが必要である。

聽覺に欠點のあるものはよほど多い。視力に關係した欠點は早く見付かるけれども、耳の方は容易に見付からない。それで生徒の中に耳の不完全なものば割合に多い。又耳其物がわるくなくても咽喉がわるければ聽力が減る。之は鼓膜にゆく空氣が少い爲である。又左右どちらか一方の欠點あるものは甚だ多い。故に幼兒の席順もよほどよく考へて、よくさこえる方を教師の方に向けてかく必要がある。耳のわるいのは十分治療するとすぐなほるので、殊に咽喉からきたのは治療さへすればすぐなほる。

聽力に申分のある兒が、大人から何か命ぜられて、それをまぢがへたり、又は知らぬやうにして居ると、大人はそれを身体からと考へずに、意味

ありてするものとして叱る、兒は逆上せる、さこえぬとなりて長ずるほど著しくさこえぬやうにすることあり。之等はひがんだ心をもつやうになりて心性上甚だよろしくない。少し氣のまはり方がのろいばんやりしてをるなど、いふ様なものは、直に耳はどうかと注意すべきである。そうして早く救はなければならぬ。

一体教師母親などが、いつもあまり大きな聲で話すのはよろしくない。必要なだけの聲を落付て出すべきである。必要以上に大聲を出すと、音の辨別力をよわくする。海岸に住む漁夫はいつでも浪の音をさいて居ますから、それになれて大聲でなければさこえない。

又教師の聲の大きすぎるのは、生徒の注意を集むる上に害がある。そも注意には有意的、無意的

の二があつて、幼き時ほど無意的注意を呼び起す必要がある。それには聲といふものを如何に利用すべきかといふに聲を少しかへて、刺戟を強くし且つ少しゆるりとするのがよろしい。即ち大事の處は聲を強くしてゆるやかにするので、之は幼児の理解をするだけの猶豫を興へることになる。此聲の點に付ては英國の教師は甚だ巧である。

幼児自身耳を保護するといふ考を入れてやるべきである。幼児はよく耳をおもちやにするが之はよほど氣をつけなければならぬ。耳をひつぽるとか石筆をいれるとか皆よくない。物の入りし時にいちるとなは奥に入る。こんな時には自身でいぢらずに直に教師に言ふやうに注意しておく必要がある。又耳の傍を打つのは危険である。

耳の教育、之も實に肝要である。即ち音の高さを

よく區別するやうに練習することが必要です。なほ音のつよさを辨別するやうにするがよろしい。そうして之等は幼児の時にすべきである、音樂的の耳は幼稚の時にしなければ甚だおそい。指の練習も幼時にしなければならぬのと同じことである。音色といふものは其音を發するものに由て違ふものである、それで物と其音色との關係を知らせるといふことは甚だ必要である。耳はよく練習すると一秒に五万以上の振動數を有して居る音でも辨別する様になる。此音の辨別の力は動物に由りてもちがふが、人でも練習に由りてよほどちがふ。一体日本の人は音に於てよほどつんげになつて居る。色に色盲あるも同じです。

耳は氣候の工合に由りて注意せねばならぬ。寒い風があまり入るのは耳に害がある。だからあま

り寒い時には綿を少し入れておくのがよろしい。

幼児が言語を言ふやうになるは初は他人の言ふのを聽いてまねるのである。ですから耳が不完全な兒は言ふことも不完全である。耳と發音は相伴ふものである。

因みに云ふが、吃りはなるべく一度でもどもらせぬやう叱らず笑はず氣永くなほすべきで、初之音をひつばるやうにして導いてやるがよろしい。

即ち赤と言はせるにはアーカと言はせる類です。又呼吸の練習が必要です。そうしてうまく言はれた時にはほめてやつて、言はうとする心をふり起してやるがよろしい。又物を言ふ前に、拍子をとるとして後言はせ、又は言ふと同時に拍子をとらせるがよろしい。

物を言ふには耳のみならず目の方も助ける。即

ち他人の話す蒸に、其口を見て居るので盲目の人の口の動かし方が見苦しいのは人の口の動き方を見ぬからである。又目で塲處を見て其處に必要なだけの聲を出すことも必要である野卑な大聲は是非共矯正しなければならぬものである。

小笠原父島の二見港(承前)

やて

大村は群島中の都とも稱すべき地で、一連の山脈は背後を擁し、海岸には一帯の林樹風潮を防ぎ、園圃も能く開けて居り、市街は主線をなして軒を並べて居る。戸數は二百六十五、人口千二百八で、わつて、本群島、硫黄島、南鳥島を管して居る小笠原島廳を初めとし、父島區裁判所、父島郵便局、尋常高等小學校等皆此村に在るのである。毎月一

回横濱を發し八丈島などを經て來る定期船は此港に碇泊すること一二日で、母島に行き二三日の後歸り來り、更に一二日滯船して、内地に向つて島の音信を送るのである。其の時は丁度内地歳暮の有様で、人々皆多忙を極めて居つた。

小笠原嶋は八丈島よりも、一層南に離れて居る事だから、一寸考へると其の人情風俗は餘程變つて居るやうに思はるゝが、實は左様でない。一言にすれば八丈島は人情風俗に於て、小笠原島は天然物に於て、大に内地と違つて居るのである。之は八丈の人は皆古く八丈に居るものばかりであるから古風を存し、小笠原は何れも近時移住したもののばかりであるから内地と大差がない。天然物殊に植物などはさすが亞熱帯の地であるから、其の種類を異にして居るのである。昨年の温度は七月

廿一日の三十二度六分を最高として、一月十九日の九度二分が最低である。先づ年中單衣一枚でゆけるのである。

島民の服装や頭髮は男女ともに内地と同じく、言葉も東京辯であるから、先きに八丈で言葉が通じなくて困つた様な事はなかつた。小學校の子供も男子は筒袖に袴、女子は海老茶袴、歸化人の子弟は洋装をして居るからなか／＼立派であつた。家屋は八丈島と司しく、風害を恐れる爲めと、土地が乾燥して居る爲めとで、軒並も椽下も共に低く、二階造りは殆んど皆無である。柱類は黄槿が桑で、屋根は櫻櫛の葉で葺き、壁は板又は櫻櫛の葉である。室内は疊はなくて板間か薄縁敷である。全体に小奇麗で香蕉や椰子の葉が窓前に揺らぐ有様は實に愉快であつた。茲に一つ云ふべき

は、小笠原では庖厨所はコック場と云つて、軒を別にして居る事である。粗の音も聞えず、煮物の香もせず、實に奇麗であつた。是れ皆歸化人に見習つたのであらう。

〇〇 扇村は大村の對岸にあつて、其の間には數隻の渡船が晝夜とも往復して居るから至極便利である。元島廳の在つた所だが、土地が狭いから大村に移したのである。戸數百廿六、人口五百七十二、大村に次で第二の村である。高等科單級尋常科二學級の小學校と、巡查駐在所とがある。當時朝鮮の前大臣兪吉睿氏は、此に亡客となつて新に小屋をつくつて居つた。村の後丘に大久保利通公の撰文なる小笠原群島開拓碑と、黒川主水春村が撰した、幕府が同島を開拓した紀念となつて居る新ばりの碑と、外に二つの碑があつた。

〇〇 奥村は歸化人の居住する所で、二見灣の最奥にあるから此の名がある。歸化人は「ヘッド、オフ、ベ」^一と云つて居る。現時小笠原島内の歸化人は、戸數二十六、人口百十である。彼等の家は白ペンキで壁を塗り、室内には椅子寢台があつて、内地の木造の西洋家屋の小なるものである。此等歸化人の先祖とも云ふべきは、本島移住の原始者なる米人子サチル、セーボレで、天保元年（七十二年前）に英人丁抹人伊太利人等同志五人で、布哇人十七名を率ゐて來たのが始めである。今日では世界各人種を集めた雜種である。今や彼等は帝國の臣民となつて、安樂に生涯を送り、日本人との間は誠に親密である。殊にジョセフ、ゴンザと云ふものは、歸化人と日本人との間に出來た雜種で、多年神戸の某學校にも遊學して居り、相當の教育

もあるから、歸化人を代表して、村政に参かり萬事都合よく運び、又學校を開いて歸化人の子弟は勿論日本人の子弟にも、英語其他の學科を教授し、且つ大村の小學校にも雇はれて、英語の教授をして居つて、同島の教育上に功勞鮮くないのである。思へば此の日東の帝國が南海の離れ島に、斯かる忠順な歸化人を有して居るのは、何等かの瑞兆であらふ。

終りに一言せねばならぬは、由來僻陬の地や絶海の孤島は、人が注意せないもので、帝國の南關なる此の群島も、之にもれないのは實に残念である。願くは家庭談話の材料に加へて貰いたいものであると思つて、かくもながく述べてたのである。

(了)

史傳

エドワード、デロング (承前)

米

溪



風に父を喪ひ、母の手一つに人と爲りしエドワードの、今は母さへ、亡き人となり、誰に寄るべき所もなく、獨り、行途を定めざるべからざるに至りしが、朝に、母の訓へに心を緊め、夕に、其の温かなる愛の懷に、正しき教を受けしより、心も自から化して、波間に漂ふ捨小舟の如き、今の身ながら、己か針路も過らで、智を研ぎ、道を修めん志深く、母の日頃の賜として、僅ばかりの貯へあるも、節して事に用ふるも、書購ふたに、

不自由勝なるか、エドワードは、唯、機みなくい
そしめば、年頃の誰彼よりも、業の進みも、遙か
に優りぬ。

斯くて、倦まず怠らで、朝には、疾く起き出で
、隣りの人の用を足し、夕には、少しの隙を見
て、手に應じたる働しつゝ、已が望める、書購ふ
に、事足りぬべき貯しつゝ、折に觸れ、事に臨みて
費を省き、用を節し、書讀む爲に、費を惜まず、
只管、其の修養を勉めたり。

座して食へは、山も遂に空しかるべく、爲すな
くして費せは、海も亦枯れんとす。ましてか弱き
女の、僅ばかりの貯、年端も行かぬ小腕の、些し
の儲、將た何にかなるべき。エドワードは、遂に、
衣食の爲に身を勞せざるべからざるに至りぬ。折
しも、其の家に、同居せるものは、金を人世唯一

の目的として、朝より夕に至る迄、孜孜として身
を勞し、心を苦め、其の目的を達するは、機まで
働くに在りと信じ居るが如くなるが、エドワード
も、此の間に在りて、二夕年程の歲月は、斯かる
浮世の苦勞と戰ひつゝ、過し、が、獨り、潜に謂
へらく、人世の意義は、斯かるものにはあらざる
べし、斯く、營々として、唯、身心を勞するのみ
ならんには、寧ろ、水車の齒車の其よりも、淺ま
しき限りなり、身を修め、世に立つ、強ち、豪傑
たらんと求め、偉人たらんことを願ふと、無意
味なることながら、已か、世に在るに當りては、
其か爲、何分にて、其の社會をして、益する所
あらしめは、人たる道は盡せりとすべけれ。好き
鳥は、木を撰ひて栖み、大ならんとする魚は、淵
に集まる。人世の事をなす、亦、獨り田園に、悠

々、開生涯を送るを樂むべきにあらざるべし。人事の曲折は、都會に多く、以て、己か身を修め、心を鍛ふよすがともなるべく、己か業を成す、便ともなりなんとて、聽て、心を定めつゝ、都門を出て、相當の主人を求むることゝしぬ。彼や、果して、何處を指さんとするか。

指し上る、旭の影を朗かに、遠山霞に罩る花の香の、折々、風に神秘を漏らす春の朝。此處ニユーヨークの某の街の一書肆に、今しも、入り來りたる一人の少年は、讀者、既に、二年以前の秋の暮、其の主人の腦裏に、深き印象を止めたる、エドワードなることを、察せらるゝならん。

「ハーリスさんは
主管の一人、如何にも叮嚀に、禮を返しつゝ。

「生憎來客に應接せるが、暫時、待たれよ、幾程もなく、出て來りし人の、卒然、
「オー、遇はんとて？何、要事にても？
深き考へに、頼める人の近つけるも知らず、思に耽れるが、劇かに、顔を揚げて。

「ハーリスさん！
思はずも、聲高に呼び掛けて、再び、口籠りしが、深き感想の、湧き來りて、胸も亂れつ、往を思ひ、今を考へては、言はん術も知らず、唯、差俯向さつ。

眞心罩れる贈り物に、親切なる其の詞、思へは、慕はしく、頼もしく、今再び、其の人の前に立ちしは、嬉しさの、胸に満つると共に、何とやらん心迫りて、涙さへ、さし組まれぬ。

「心清きエドワード！今は、友を求めんとて來

りしか。好し、一人其の友はあり！

年長けたる紳士の、詞を柔かに云ひぬ。

* * * * *

烏兔匆々、去來すること五霜雪、ハリスの語

に於て、最も信用ある手代として、知らるゝもの

三人、而も人は云ひぬ。其の確實質直、深く主人

の信頼を得て、顧客の愛を受くるものは、眞心を

推して、天の恵を信せる、エドワード、デロング

其の人なりと。

予竊に謂ふ、我が國の家庭に於ける教は、寧ろ

兒童に對しては、甚だ大人らしく扱ふにあらざ

や、と思はる。何々するなかれ。何々すべからず

と。理を説て、解する能はさるもの、固より、止

むを得ざる所なるも、夫よりは、一層、小供らし

く、斯くあるべし、斯く試みよ、と教へて、其の

べからず、と、なかれ、に陥らしめざるを期して

は如何。禁止の詞は、其の何故を解せざることをわ

るのみならず、其の爲すべき所を知らざるを奈何

せん。將た、又曰く、豪き人となれ、強き人とな

れ、と、此に於てか、兒童の理想を問へは、太閤さ

んか、義經かにあらざれば、清正か、信長なり。

斯くして、其の志氣を鼓舞し、之を作興するはよ

し。唯た困る事には、着實に、鋤鋤を取りて耕す

ものなく、眞實に、店方を支配する主管たる人な

きにわらずや。志を大にするはよし。着實ならざ

るは其の弊にわらずや。蓋し、彼の英雄や、豪傑

の士は、皆之、幾百年にして、稀に相遇ふべき、

風雲に會し、以て其の羽翼を伸べたるものにし

て、決して、秩序ある社會に於て、冀ふべき所に

わらず。されば、是れ、平和の世の、眞の理想と

すべき所にあらざるべし。斯世の事は、變の如く、
 一舉して、大に得べきものにあらず。壹歩々々、
 微を積み、理を盡して、始めて成るものなれば、
 此の點に於ての訓育は、大に從來の、家庭の訓育
 に缺くる所に非ざるか。人として世にある、苟も、
 一毫たりとも、己か存する爲に、世に益すること
 あらんか、以て人たるに恥ぢざるべし。豊公の經
 綸も、一農夫の鋤犁も、其の天稟の性を盡すに於
 て、何の差かある。要は、各相應する事に致すに
 在り。之れ、エドワードを傳ふる所以なり。

(完)

Sprich, was wahr ist; trenk, was klar ist; isz,
 was gar ist.

語るに眞實を以てし
 飲むに清澄なるものを以てし
 食ふに全きものを以てせよ

春風春水



雨峰生

幽けき天の眞井より
 まるび出でたる谷清水
 野之え畑こえ目もはるに
 河瀬靜かに馳りゆく
 その河沿の橋のもと
 佇むわれに語るな
 人家稀れなる村里を
 離るを厭ふ情あるか

雪を浮べし花筏
岸より岸に定めなく
水の面を縫うて流れくる
無言の春や情なきか

身の運命を知りにける
花や怨ずる色もなく
ちりたるまゝに流れゆく
君天上の使かや

かの銀鞍に鞭をあげ
うたげに酔うて月をあび
微風に吟歩かろく占め
春の夕にあこがるゝ

塵の巻の詩人は
かの紺青の曙の空
色に狂うて春を追ふ
昏夢は永く醒めやらで

短き命運ななき時間
何れはなれぬもつれ糸
しばし宿りを野に山に
契りしえにし唧つかや

若し揺りかごに夢結び
わかき昔しのありし日を
尙も追はんとつとむるは
壯者の今を知らぬよな

わゝ萬花開きて天地の
無邊の萬象生れ出で
萬花は落ちて春閉づも
こゝに理想の影ありな

見よ薫風の南より
人の胸より胸にしみ
若葉の夏と變りなば
乾坤やがてつよく活く

春シーズンの化城かや
紅紫にそみし花衣
ぬきかへゆくぞとこしへの
光りはこゝにやとる見よ

新鉢詩學ひ卒へし友の許に

平野ゆき子

無情が有情の体なれば 有情は無常の姿なり
何か恨みん世の中は うつろひ易きものなるを
さはさり乍ら君と我 月かぼるなる上野山
花散りかゝる隅田川 行きみし事もふりつるに

春糸遊のもゆる野に
すみれつみつゝうたひつゝ、
雲雀の聲の地にちちて
西の山もとかすむ時
ともに柴生にやすらひし
追懐こそは残りたれ

秋晚鐘を遠く聞き

千入の紅葉かざしつゝ、
見渡すかぎり稻の穂の
黄金の波なす田の面より
飛び立つ雀眺めてし
思ひいでこそこのこりたれ

ひつみし友の業成りて 嬉しき今日の其掣に
辛き別離の潜みしよ 君行きますか故郷に
雪や螢と學び舎に つみし光を身におひて
君よゆきませ故郷に 飾る錦を家づとに

みやげの劍

つねを

戦さにいつた 兄さんが
敵の大將 うしろ手に
かたく縛つて つよさうに
坊がたのんだ みやげよと
一ばん好きさな 劍持つて
ゆふべ歸つた 夢を見た

雛のわかれ

東くめ子

錦をよそふ

わが友と

うちならびつゝ

眺むれば

こがねちりばひ

此とのに

桃のはなさへ

匂ふなり

小さき姫が

うちよりて

紅葉なす手に

ものそなへ

かしづく様を

うつくしと

見るも今霄を

かぎりとは

また明日よりは

一年を

いぶせきはこに

籠められて

ひとり淋しく

すこすへき

あはれはかなの

運命かな

折にふれて

和歌子

鳥羽玉のやみをやぶりにて走りゆく車のあたり六の花ちる
見渡せば小金か原もしろかねにうもれてあけぬ冬の明ほの
六の花ちりしなごりか山のかひはかのこまたらにけふもそめたり

鳥一羽ねくらにいそく冬枯の森のあなたに夕日かややく
冬枯の雑木しつかにうち渡す原野の末に夕日かややく
天も地も心しつかに暮れてゆく小金原に月かげほそし
つくはねはそれとも見えす森も川もいつしか暮れぬ常陸野の
原白雪のふりつむ野邊に我汽車の烟はしりて火花ちるなり





説林

歐米の家庭教育及幼稚園

保育視察談

下田次郎

私は只今中村さんから御紹介になりました下田
 といふ者でござります、今日はフレibel會で何か
 と云ふ者と云ふ御話がござりましたが、私は幼稚園の
 事に就いては極めて門外漢でござりまして、向う
 で學校を見る内にも幼稚園の事は極めて粗漏で
 あつたと言つて宜からうと思ひますから、諸君に

幼稚園に就いて御参考になることを言ふことは出
 來ぬと信じて居ります、家庭を見るのも婦人の方
 が宜いので、男子は到底這入り込めぬ所もあり、
 又彼方此方を歩くので一通りを能く見るとも出來
 ず、それで外國の家庭の模様も極めて不充分で
 ござります、さうすると此方に出て何も御話をする
 とはないのでござりますが、其他赤子を養ふて居
 る所とか、赤子でなくても月足らずに生れた者を
 卵を孵化する様に人間にする事とか、さういふ事
 を交せて填め合せしやうと思ふのであります
 先づ家庭の方から申しますと、家庭と云ふは御
 承知の通り一の家族があつてその各員が相互に活
 動する内輪の舞臺或は有様であります、其家族
 が成立たぬと國も成立たぬ譯でござります、社會
 が成立つのは家族が本である、これまでは社會の

本は一個人であると云ふ様に申して居りましたけれども、今日は其説は變つて社會が成立つは一個人にわらずして社會と似寄りのあつて最も小さいものは家族である、家族と云ふものは社會の本であるので、個人は社會に似た所はないと申して居ります、ウイルマンの如きもオーギュスト、コントの如きも家族は社會の原子体であると申して居ります、家族には何處も重きを置いて居るので、向うでも羅馬時代は別して家族は重きを爲して居つたのでありまして、其時代は家族と云ふことは唯々家の血が續いて居る者ばかりでなくして、當時の奴隷も這入つて居てそれが一家族になつて居る、故に分業も出來て居て一の小さい社會になつて居つたものであります、それで此頃申す家族と羅馬時代の家族は意味が少し差つて居る、さうして西洋

では家族の關係は法律其他の事に於て議論もあつて、家族の間でも權利義務と云ふことが出來て居るが、日本でも民法が出來て種々の事が規定されたが東洋全體の家族と西洋の家族は少し趣きが差つて居ると思ふ、向うは家族の間にも權利義務の思想があつて、一つ罷り違へば法律沙汰となるのである、つまり羅馬法以來の精神が傳はつて居るが、日本の家庭は人間は別で同體である、到底離るゝことの出來ぬものと云ふ考へを有つて居ります、西洋では一の家族が亡ぶると云ふことは、日本或は支那で思ふて居る様な重大なことではない、西洋では大變に金を溜めても後繼がなくして誰に渡すか判らぬと死ぬることは珍らしくないが、東洋は家族を斷絶させるは非常の事であつて、種々の方法を以て家を大事にする傾きがある、それ

であるから一の家を寄つてたかつて守る考へは西洋にもあるが、東洋ほど鞏固でないと思へる、それで東洋では家族相互の者は互に人は異つて居ても第二の我と云ふ考へがあるから、自然呼び名に於ても家族相互の者を他人に對しては呼び棄てにすると云ふは、自分の同じ片割れであるからそれを尊敬するは自らを尊敬すると云ふ考へであるかと思ふが、西洋では其處に區別があつて同じ家族であるものでも他人に對して言ふ時は何君と云ふ様な尊稱を附けて居る譯であります、それから夫婦の關係に致しても西洋では少し罷り違ふと直ぐ訴訟があつて種々の争ひがあるが、日本では民法が出来ても夫婦の争ひは西洋の如く多くない譯であります、手足の爪を放しても皆夫への爲じや物」といふ文句かよく其の觀念を代表して居ます大体

の觀念と云ふものが一方では家族全体を我を同一に見ると、他方では家族全体を別々に考へて見ると云ふ區別があると思ふ、從つて家庭に於ける感化が餘程異つて來ると思ふ、父は父、子は子と云ふ區別が附く、子は大きくなれば親の世話をするは勿論であるが、日本の者の孝行と西洋の者の孝行とは少し意味が差ふと思ふ、親子の愛情を日本では子は親と同一に思ふて居て西洋人が來ても親子の關係に感ずるが、向うはそれが薄いと思ふ、それで西洋と日本とで見ると嚴格さが差ふ、西洋では日本より随分厳しい事をやる、日本の弊を言へば子の愛に溺れて子を自儘に育てると云ふ所があると思ふ、これが家族と云ふ事に就いて東洋と西洋の一般の區別であると思ふ、

それから先づ獨逸の家庭に就いて少し御話を致

します、一体獨逸の國は萬事餘程軍隊的警察的であるが、學校にも警察が這入る、補習學校の如きは理由がなくして休んだ者は警察に拘引するとか五十錢の罰金と云ふ様に警察で取締つて居る、學校に於ても教員の命令は生徒はそれを畏みて聞いて居る、家の内でも長老と年少の區別があつて、飯を食べる時でも父や母は御馳走を食べて居る子にマヅイ物を食はせても不服は言はぬ、夜は子供は八時に寝る寝ねば制裁があると云ふ工合、それから獨逸は子が多い佛蘭西の様に一家二人以上の子が無いと云ふことはない、五人以上ある家は珍くない、家の内に於ての秩序はさうであるが學校に於ても極めて秩序的になつて居る、それで物を言ふにも一二二と云ふ様に番號を附けて言ふ、學校で教へらるる通り家の内でも子供が第一何第

二何と云ふ様に番號を附けて言ふ事があるのである、一体獨逸の女と云ふものは世話女房的になつて居る家の事を働か編物が上手で外の家へ行つても相互に編物をして話す、所に依れば公園に十河人彼方此方に机を取巻いて編物をしながら話して居る有様である、向うの女の兒は夏は此處（腕を云ふ）から此處は丸出し、足も膝から丸出しで、男の子の方は却てそうしない、女の子は衣肝に至り袖腕に至ると云ふ風である、竹馬にも乗る、又音楽は小さい時から慣れて居る、往來でも舞踏の様な事をやるを彼方此方で見受けました、それから幼稚園の方であります、私が見たはライプチヒに一ツありましたが、幼稚園は二三日泊つて居れば宜いを通り過ぎに見るのですから、一週間にドウいふことをやると云ふことは見ませ

ぬ、其處で見たい手工の展覽會があつたので、重
 もに此方でやります細い幅の種々の紙で四角に種
 々の形に編む、それから向うの御伽話、土臺を作
 つて其上へ人形や木や家の模様を据へて御伽語の
 實況をこしらへて居つた、雪白姫といふがあつて
 七人の小人が居ると云ふ所、山の様な物を造つて
 やつて居る、又景色を作つて彼方此方に置いて居
 る、機械体操の雛形をすへた運動場も置いてある
 それから土で拵へた盆、壺、徳利板に見易き彫物
 をしたの、糸で繪の輪廓を縫ひ附けたのもありま
 した、又紙で拵へた函の類、圖案の様な繪なども
 ありました、

それから伯林に大なる幼稚園があります、それ
 は伯林國民教育會と云ふのかあつて、獨逸の皇后
 陛下の保護を受けベスタロッテ、フレーベルの家と

いふを持つて居る、其處には幼兒に限らず乳呑子
 を預る所もあり、幼稚園がある幼稚園と小學校と
 の間に中間の學校もあります、幼稚園は二歳半か
 ら五歳、中間の學校は五歳半から六歳、小學校に
 なると六歳から八歳の子供が行く、其他六歳から
 十四歳までの男の子女の子が、學校から歸つても
 親が仕事中で居處のない者が來て見易き手工など
 して居る處もあります、其處では午飯を日本の五
 錢で食べらるゝ様になつて居ります、それから幼
 稚園の保姆や教員養成する所もあり、又別に冬は
 教育の講習會を聞いて居る、以上は第一の家でや
 つて居る、第二の家は料理それと家事の學校、料
 理の方でも唯々家の内でする料理と高等の料理の
 二通りあつて一方は念が入つて居ります、それか
 ら上流社會の娘が料理を習ひ家事を習ふ所と、

學校の子供の習ふ所もあり、また家政や、細君の補助の練習科と云ふものがあつて家でする事を習ふ、家事教員養成科もある、又下女の心得を教ふる處もある、大体それだけをやつて出て大變大なるものであります、これは其家の繪ハガキで砂を以て種々の遊びをして居るのであります、此(寫眞を示す)は幼児か輪なりに繋かりて居るのであります、此れ(寫眞を示す)は子供が食事をして居るのであります、此處は火曜の十時から一時は公開で其間に行けば案内して見せます、外國人が多く參るのであります、遊戯などは別に異つたものは見ぬでありました、生徒は貧富種々あります其の詳しい事は此の年報があります、西洋は高等女學校でも小學校でも年報を配りますからそれを集めれば皆な判ります、日本でも年報を出せばお

互に參考にならうと思ひます、ライプチヒには小兒預所があつて、お母さんが畫工場に出て誰も家に守りする者がないと云ふのが預けに來る、夕方仕事で済んで伴れに來る、これは(寫眞を示す)一例で澤山子供が居ります、其處で幼稚園のやり方で四十人ばかりの小さい小兒が居りまして、保姆は二人、勞働者でありますから着物などは穢いのであります、遊戯は獵師が犬をつれて兎を追ふことをやりて居りました、又小包郵便配達、配達夫は軍人の様な服を着て一種の喇叭を吹いて馬車に乗つて居るそれを真似して居りました、唱歌をして運動するが通例であります、其間に徒手体操もやります、獨逸は幼稚園の芽を出した本國であるから幼稚園が盛んであると思はれるか實は反對で餘り繁盛しませぬ、幼稚園に反對の意見を持って居る

人もあります、

(以下次號)

讀書につきて (承前)

牧羊

前號に於ては、書籍を讀むことの利益を列擧して見たが、本號では更に進んで讀書の注意といふことに書き及ばざうと考へる。

現今の社會は丸で書籍の社會である、新刊書の廣告に顯はるゝもの日々數へ盡す能はず。實に現今の世界は書籍を以て充滿して居る。然し詳に觀察する時は更に一讀の價値だも有せざる悪書籍も亦數へ盡されぬ程あることは事實である。次に又極めて一時的の出版物がある。其時には極めて有益であつたかも知れないが、其年なり月なり

を經過し去つて、或は又其出來事が消滅してからは、一向價値を持たない書籍である。或は又特殊専門の書籍がある。即ち特殊専門の學術を研究せんか爲に、又は或る特別の目的を有する人には極めて必要であるが、夫れ以外の人が見ては、讀んで興味もなければ利益を得る所もない。

故に書籍に依つて、自家の智見を進めんと欲する人は徐ろに汗牛充棟ならぬ書籍の中で、其最も適當せるものを選択することが、頗る必要である。書籍の選擇、これ實に讀書家の力むべき第一要件である。

次に或書物を得て、さて之を讀下しようといふ時に當つて、先づ其書籍を概觀することが必要である。即ち一々精讀するに先だつて、先づ著者の緒言とが序文とか若くは目錄とかを一通りスラー

つと概観することに依りて、吾人は著者の意見を先づ洞察することを得る所からして、大に其書籍の理解を容易くするといふ便がある。抑々亦緒言なり序文なりはいはい人の家の玄關の様なものであるからして、其書物を讀む時に當つて之を脱かして行くといふ事は例令は案内を乞はずに人の家に飛び込む様なものであるから、這入つてからは非マゴ付かざるを得ない譯である。夫から又、例令其中に困難な字句で了解し難い所があつたからといつて、其度毎に必らず一々骨を折つて夫を解釋せんが爲めに、行き留つて居るといふことは頗る損な次第である。だんく先きを讀んで行くに従つて、自ら其意義が氷解せられる事もあり。且つは、讀書百遍義自通焉で、再讀三讀する中に獨り手に理解せられる。尙一つ必要な事は讀んで

行く中に、若し目新しい面白い必要な章句に出遭つた時は、是非其處に印標を施して行くことである、これは大に他日參考の便宜になり、又再讀する時の便宜にもなるし、且つ大に記憶をも助ける方便となるものである。

道徳學上哲學上等の書物を讀むに當つては又、たい著者の説なり意見なりを知らんとすることばかりが能でない。これ丈けではたい誰がどういつたとか、誰の説はどうだとかいふ歴史的の智識を得るに過ぎない。然し吾人の讀書に付きての主要の職分といふものは寧ろ著者の説なり意見なりが果して當を得たものだか否かを考究して、著者の意見に由りて其問題に關する吾人の精確なる智識を進歩發達せしめることであらねばならぬ。吾人が讀書に由りて東西古今の古士と自由に交際談論

することが出来るといふのは實に、此の如くにして始めて得られる次第である。たい何かなしに書物に書いてあつたからといって信じて仕舞ふのは殊に今日の世の中最も注意せねばならぬ。彼も人なり吾も人なり、たい何も平にも著者の意見に盲従して仕舞ふでは、吾の價値は零だといはねばならぬ。

夫から讀みもて行く中に書物の不都合な點があつたならば、是非とも夫を見逃さないで、其書物の中にも或は他の筆記帳にでも夫に對する自分の正當な意見を書き附けて置くことが必要である或は又書物の全體の順序排列なども自分の意に満たぬものがあつた時は、夫を自分の考で直して書いて置くことなど、何れも自家の思想を整頓し論理的精確を得る所の方法である。

書物の附録を作ること、これ亦必要なる方法である。讀んで見て必要なと思ふ點を採擇して一の附録に造り以て自家の復習若くは記憶の便に供するので、最初は頗る面倒であり苦痛を感じるけれども、他日の利益は夫を償つて餘がある、且つ同種類の他の書籍を讀む時に當つては、之に由つて大に理解を助ける、何故かといふに、如何ほど價値ある書籍だからといって、そうく違つた事實は記載して居るものでないからである。

但し書物の食癩に向つては十分の注意を要する世の中には終日讀書に耽つて、併も其智力に何程の進歩をも來さない人がある。これは要するに、書物を讀むことを好むけれども、併も其中にある眞理を坪量しない人達である。彼輩の眼は、たい空に紙面を走つて居るのである。或は言葉が彼輩

の耳邊を掠の去つて居るのである。落語を聞いてア、面白かつたと思ふと同時に消え失するが如く若くは夏の雨後の紅兒の天と同じ様に。會々之を消滅せしめない所の人達は、随分之が記憶に力める、そして博學の名を捕へんことを考へる。併も彼等は恰も食ひ續けに食つて消化器を害した人の如き、夫である。要するに、たい智識の容量をのみ増加しやうとしないで、精確なる智力を増進せやうとしないからである。

(未完)

Wie Man's traits, so geht es.

力むる所に方法あり



保育要項

雑

緑

女子高等師範學校
附屬幼稚園

明治三十三年文部省令第十四號小學校令施行規則に基づき女子高等師範學校附屬幼稚園に於ける保育の要項を定むること左の如し。

第一組 織

當園は年齢満三歳以上小學校に入學するまでの幼兒を收容する所にして分ちて本園及分室の二とす。

本園に於ては完全なる保育の理論に則り經濟の許す限り一切の組織設備を完成し其他の方便をして

毫も遺憾なからしめんことを期し以て理論の完全なる適用を研究する所とす。

分室は保育の理論の範圍内に於てなるべく簡單なる方便を以て實際の適用を研究する所とす。

本園の幼兒定員は百二十名にして年齢によりて三組に分つ。

- 一の組 滿五年以上就學に至るまで。
 - 二の組 滿四年以上五年に至るまで。
 - 三の組 滿三年以上四年に至るまで。
- 分室の幼兒定員は六十名にして合して一組とす。

第二 保育の方針

凡そ幼兒は心身共に發達の最も旺盛なる時期に在りて將來に於ける二者の傾向は此時期に於て形成せらるゝこと最も多きものなれば、苟も其教養にして一たび方針を誤りたることあらんか、永く不良の影響を心身發達の上に留め、生涯恢復し難き習癖を與へ救ふべからざる不幸の域に沈淪せしむることあるに至らん、是れ此時期の教養最も必要なる所以にして確固たる一定の方針の下に適當の方法を考究せざるべからざる所以なり。因りて當

園に於て定むる所の方針を左に掲ぐ。

- 一、幼兒をして健全なる身體の發育を遂げしむること。
 - 一、幼兒の心情を涵養し且つ善良の習慣を得しむること。
 - 一、幼兒の覺官を練習し其成長に適應せる心力の發達を遂げしむること。
- 此の如くにして幼兒をして將來道德的品性確立の素地を作らしめ、以て家庭教育を補ひ併せて完全なる學校教育を受くるに適當ならしめんとす。

第三 保育の方法

保育の方法は勉めて幼兒心身發達の度に適應せしめ、特に身體の健全なる發育を遂げしむることに注意し、漸次に心情の涵養心力の啓發を力め、且つ摸倣性を利用し實際の事例によりて自然に善良の行爲に誘致せしめんことを期す。

幼兒心身の發達は専ら其活動に由るを以て、保育に於ては之を適切に誘起運用せしむるを要す。保育の方法として當園に採用する事項を遊嬉唱歌

談話手技とし、各事項に配當する一日中時間の割合は左の如し。

一遊嬉

一唱歌 談話手技

凡そ三時間
凡そ一時間

第四 保育事項

一、遊嬉

遊嬉を利用して教育するは幼稚園の本旨なるを以て、遊嬉は保育事項中最も重要な項目にして、身體の健全なる發達を助長せしめ、且つ其心情を快裕ならしめ、共同和樂の精神を養ふを以て要旨とす。

遊嬉は隨意遊嬉及共同遊嬉の二に區別す。

隨意遊嬉は危険害惡等を誘致する恐あるものを除く外なるべく幼兒をして任意に遊樂せしむるものにして主として自然の良性を發達せしむ。

隨意遊嬉をなさしむるに當りては専ら左の事項に注意するものとす。

1. 遊嬉の種類に注意して、幼兒の身體を損し、品性を害するか如きものを避けしむること。
2. 成るべく幼兒を指導して任意活潑に遊樂せしむ

ること。

3. 他人を妨害凌駕し物件を破壊汚損する等の行爲なからしめ、且つ自己の使用せし物品はなるべく自ら處理する習慣を得しむること。

共同遊嬉は幼兒をして共同して遊嬉をなさしむるものにして、通例室内に於てし、或は遊園に於てし、共同によりて生ずる興味を起さしむ。

共同遊嬉の種類は左の標準によりて選擇す。

1. 幼兒の身體四肢の運動に適當せるもの。
 2. 幼兒の理解力に適當せるもの。
- 共同遊嬉をなさしむるに當りては専ら左の事項に注意するものとす。

1. 同一の唱歌に伴ふ遊嬉と雖も必しも常に其形式を一にせず、幼兒の年齢と發達とに應じて、之を變化し簡單複雑其度を得しむること。

2. 遊嬉の形を美ならしめ、幼兒の動作を齊整せしむることは必要ならずとせされとも、徒に形式にのみ拘泥するときは遊嬉を以て却て勤勞の苦痛を感せしめ、爲に遊嬉の精神を失ふに至るとあるを以て、幼兒をして衷心より遊嬉の事項

に同情を起さしむること。

3. 規律と自由とは相待ちて活動を調節するものなるを以て、遊嬉に於ては幼兒相當の規律に服すへきことを悟らしむると同時に、其範圍内に於てはなるべく自由活動の餘地を存せしむること。

4. 幼兒の自ら發表する動作は最も自然的なること多きを以て常に注意して之を観察し遊嬉の形をしてなるべく幼兒自然の動作に近接せしむること。

二、唱歌

唱歌は幼兒の心情を快楽純美にして徳性涵養の資たらしめ、聽覺發聲機關及呼吸機關を練習して、發音の自然的發達を助長せしむるを以て要旨とす。唱歌の材料は其歌詞樂曲共に極めて平易なるものを主とし凡そ左の標準によりて選擇す。

1. 歌詞は古語雅文等より成るものを避け、主として談話躰若くは普通文躰にして幼兒に理解し易きもの。

3. 歌詞の内容は幼兒思想の範圍内にありて興味を

惹起するに適するもの。

3. 樂曲は音域餘り廣からず、凡そDよりDに至る間にあるものとし、音程は簡易にして拍子は普通 $\frac{3}{4}$ 或は $\frac{2}{4}$ に屬するもの。

唱歌をなさしむるに當りては専ら左の事項に注意するものとす。

1. 單に歌詞のみを以ては十分に幼兒の想像力を喚起すること能はざる場合あるを以て、歌詞の意味を現はせる繪畫若くは適當なる實物を多く利用すること。

2. 唱歌の種類によりては適當なる動作を聯結せしめ、以て其理解と興味とを増さしむること。

3. 凡そ幼兒の心意活動は時々境遇によりて變化するものなれば、常に其状態に注意して之に適應せる唱歌を唱はしむること。

4. 時々音程を唱はしめ以て特に發聲機關及呼吸機關の練習をなさしむること。

5. 幼兒の發達に應じて發音の混亂を矯正すること力をめ、又咽喉口唇の開閉を十分ならしめ、常に美聲を以て唱ふ習慣を待しむること。

6. 唱歌をなさしむるに際しては發聲を自由ならしむることに注意し、なるべく自然の姿勢を保たしむること。

三。談話

談話は幼兒の心情を涵養して徳性啓發の資たらしめ、觀察注意の習慣を得しめ、言語を練習せしむるを以て要旨とす。

談話は幼兒の心情に適切にして、其實際の境遇に近きものとし凡そ左の種類に分つ。

1. 寓言及童話

2. 事實談話

3. 偶發事項

談話に於ては主として左の事項を授く。

1. 自己に關係せるもの

(い) 自己の所有物 所有物に關する知識及其取扱ひ方

(ろ) 自己の身體

(は) 自己の精神 身體に關する知識及其取扱ひ方

(に) 家庭に關係せるもの 正直勤勉勇氣等の諸徳

(い) 父母 父母に對する心得

(ろ) 兄弟 兄弟に對する心得

(は) 婢僕 婢僕に對する心得

(に) 家屋器物 家屋器物に關する知識及其取扱ひ方

3. 社會に關係せるもの

(い) 長上朋友 長上朋友に對する心得

(ろ) 日常親近の事物 日常親近せる事物に關する知識

4. 自然に關係せるもの

(い) 動物 動物に關する知識及動物愛憐

(ろ) 植物 植物に關する知識及植物愛護

(は) 礦物 礦物に關する知識及其取扱ひ方

(に) 其他自然現象 自然現象に關する知識感情

左に記するか如き事項を現はせる談話はなるべく之を用ふるを避く。

1. 恐怖の情を激發せしむるもの

2. 殘酷なる所業を現はせるもの

3. 惡意の成功を現はせるもの

4. 其他修身に關する反面的事例を現はせるもの

談話に於ては専ら左の事項に注意するものとす。

1. 躑け方に關する談話はなるべく實際の事例により時機に應じて之を授け、幼兒に相當せる言語動作に慣れしむること。
2. 自然物自然現象及人工品等に關する談話はなるべく幼兒の直覺し得べきもの、又は思想の範圍内にあるものに止めて、専ら觀察注意の力を得しむることに注意し、其方法は隨意遊嬉の際幼兒の觀察する事物につきて時に觸れ機に臨みての談話を以てし、或は寓言童話事實談話等を授くるに際し、其中に現はるゝ事項につきての問答等を以てすること。
3. 談話は完成せるものとして之を授け、幼兒の心情に影響して之を涵養し豊富ならしむるを以て主とし、修身開智等に關して特に其事項を抽出して授與するは之を避くべきこと。
4. 談話はなるべく幼兒の直覺に訴へ、其想像を喚起し易からしめんかため繪畫實物標本等を多く利用すること。
5. 幼兒の心意は尙未だ概念構成の力發達せざるを以て強て抽象作用を働かしめざることを。

6. 幼兒をして自ら語らしむることに注意し、以て漸次思想發表の方法に慣れしめ且つ發達に應じて發音の正當を得しむること。

談話は保育事項の一として特に時間を定めて授くるものなりといへとも、其他の事項に於ても必然に相伴ふものなれば、他の事項を授くる際に當りて常に上掲の主旨に由りて適當なる談話をなすべきものとす。

四、手技

手技は手及眼を練習し、工夫想像の力と美的心情とを養ひ、心意發達に資するを以て要旨とす。

手技は専ら幼兒の自然に適應し興味を惹起するに適したるものを選択して凡そ左の種類とす。

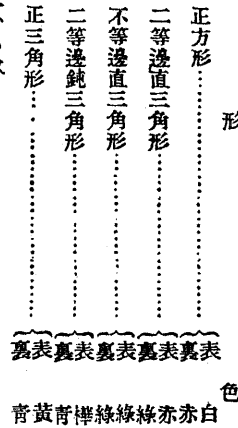
1. 六絛
2. 積木

積木は左の三種に分ちて各組に配當す。

| 第一 | 第二 | 第三 |
|-------------|----|----|
| 正 方 体 | 四 | 四 |
| 長 方 体 | 四 | 四 |
| 方 体 | 四 | 四 |
| 大三角柱 | 四 | 四 |
| 小三角柱 | 八 | |
| 柱 体 | 四 | |

3. 板ならべ

板ならべには左の種類の板を用ふ



4. 箸ならべ

箸ならべは金屬製又は木製の箸を用ひ其長さを五分一寸二寸三寸とす

5. 環ならべ

環ならべは金屬製の環大中小の三種とし更に此三種の全環半環及中環の四分の一のものを用ふ

6. 紐おき

紐おきは絲或は打紐を用ふ。

7. 貝ならべ

貝ならべは小貝を用ひ或は種子小石等を用ふ。

8. 書き方

書き方は始は石板を用ひしめ進みては紙面に畫

かしむ。

色彩は最も幼兒の興味に適合するを以て其練習のためには色鉛筆を用ひ、漸く進みては簡單なる繪具を用ふることあるべし。

9. 縫取り

縫取りは絲と針とを用ひて臺紙に簡單なる形を縫取らしむ。

10. 紙さき

紙さきは最初は諸種の形狀の紙片を與へて臺紙に貼付せしめ、其貼付方に熟するに至りて剪刀を用ひて自ら形を剪出せしむ。

11. 紙かり

12. 紙くみ

13. 紙たゝみ

紙たゝみは方形三角形圓形等の色紙を與ふ。

14. 豆細工

豆細工は白豌豆と織竹とを用ふ又麥藁を加へ用ふることあるへし。

15. 粘土細工

粘土細工は粘土を用ひ五月より十月に至る間に

之を授く。

幼児の發達に應じて與ふる手技の種類は凡そ左表の如し。

手技をなさしむるは凡そ左の方法による。

1. 幼児をして各自自家の工夫によりてなさしむるもの。

2. 談話唱歌等其他の見聞によりて幼児の得たる觀念を啓發指示してなさしむるもの。

3. 手本若くは實物を示してなさしむるもの。

幼児をして自ら思考想像の力によりて活動せしむることは教育上必要なる條件なり、されは手本若くは實物を示してなさしむる方法を用ふるに當りても強て幼児の興味に反し、其活動を抑制せざらんことに注意するものとす。

手技に於ては専ら左の事項に注意するものとす。

1. 思物は諸種に區分せらるといへとも其使用に際しては一律の形式に拘泥することなからんかため、各種必しも常に別々に使用せしむるを要せず、便宜相混用せしめ或は其取扱ひを多方的ならしむること。

2. 思物に屬する名稱の如きはなるべく幼児に親近なる形を以て稱へしむること、例は積木に於ては正立方体をマシカク長立方体をナガイシカク立方体をウスイシカク三角柱をサンカク方柱をシカクノハシラ邊をフチ角をカド又はスミと稱するか如し。

3. 色彩は専ら美的感情を涵養するに適するを以て其配合に就きては特に注意すへきこと。

4. 色彩は正しき名稱により稱へしむといへとも、各種の間色に對しては其實際上の區別を知らしむることに止め、強て嚴密なる名稱を附せしむるに及はざること。

5. 色彩を知らしむるには、なるべく幼児に親近なる諸種の物体と比較せしめて自然に其名稱を知得せしむること。

各組に於ける手技配當表

| | | | |
|-----|-----|-----|-----|
| | 三ノ組 | 二ノ組 | 一ノ組 |
| 第一期 | 第二期 | 第三期 | 第一期 |
| 第二期 | 第三期 | 第一期 | 第二期 |
| 第三期 | 第一期 | 第二期 | 第三期 |
| 積木 | 同 | 同 | 同 |
| 同 | 同 | 同 | 同 |
| 同 | 同 | 同 | 同 |
| 同 | 同 | 同 | 同 |
| 同 | 同 | 同 | 同 |
| 同 | 同 | 同 | 同 |

| | | | | |
|------------------|--------|--------|--------------|--------------|
| | 紙 み | 方 畫 | へ 具 なら | へ 板 なら |
| | 同 | 同 | 同 | 同 |
| | 同 | 同 | 同 | 同 |
| 工 粘 土 細 | 同 | 同 | 同 | 同 |
| 同 | 同 | 同 | 同 | 同 |
| | 同 | 同 | 同 | 同 |
| 工 粘 土 細 | 同 | 同 | 同 | 同 |
| 同 | 同 | 同 | 同 | 同 |
| | 同 | 同 | 同 | 同 |
| | 同 | 同 | 同 | 同 |

●注意 積木は第一第二第三の種類に従て木片の数を定めたりといへども必しも常に其数に従ふを要せず其種類の範圍に於て幼兒の状態に應し適當に配分するも妨なし
板排へは別に數を定めず時に隨ひ機に隨みて適宜に配當するものとす
箸及環は或は別々に與ふることあり或は相混用せしむることあり其數も亦適宜に分ちて與ふるものとす

三月をやよひといへること

せ く 生

鎌倉時代の歌人にして、拾玉集といへる名高き歌の集を著はされたる、大僧正慈鎮和尚は、三十一文字の歌の名人たりしのみならず、當時流行の今様の作者としても亦名高かりし事、誰しも言ふ處なり。就中其の春夏秋冬四季を歌へる四首は小學唱歌集に載せて、可愛ゆき兒童の口々にまで唱へられつ。今其の春を歌へる一首を記せば、

春のやよひのわけばのに、
四方のやまべを見渡せば、
花ざかりかもしらくもの、
かへらぬくまぞなかりける。

唱歌集は「かへらぬ峯こそなかりける」と改めたるもの。

これぞやよひの名高き歌と、七百年このかたの歌ひ物たりしも無理ならず。舊曆ならぬ今月、尙

この光景ありさまを迎へざるも、やがては眞まことのやよひなり
 何處いづこもかなじこの長閑のびけさは、年中ねんちゆうのいと心地こころよ
 き樂たのしき時期じき、一生しやうにたとへて其そのの少年期せうねんきとも稱とと
 へつべく、春宵しゆんしやう一刻いっくわく、價千金たひせんきんの句く、亦また念頭ねんとうに躍おど
 なり。

尙なほ今月こんげつをやよひといひたる例れいの二三にさんを諸書しよしょより

ぬけば

敏行朝臣としゆきちそんの歌うたに

暮くれて行く彌生やよひのそらをながむれば

八重やえの霞かすみをかへるかりがね

古今集ここんしゆの中の歌うたのはしがきに四つあり。

彌生やよひにうるふ月のありけるとし詠よける(伊勢)

櫻花さくらばな春はる加かはれる年としだにも人の心こころに飽あれやはする

彌生やよひに鶯うぐいすの聲こゑ久ひさじう聞きざりけるを詠よる(貫之)

鳴留なきとどる花はなしなれば鶯うぐいすも

果はては物ものうくなりぬべらなり

彌生やよひのつごもり方かたに山やまを越こえけるに山川やまがはより

花はなの流れながりけるをよめる(深養父)

花はな散ちれる水みづのまにくとめくれば

山やまには春はるも無なくなりけり

彌生やよひのつごもりの日花ひはなつみより歸かへりける女共むすめども

を見て詠よめる(躬恒)

留とどむべき物ものとはなしにはかなくも

散ちる花はなごととにたぐふ心こころか

彌生やよひのつごもりの日雨ひあめふりけるに藤ふじの花はなを折お

りて人ひとに遺つがはしける(業平朝臣)

濡ぬれつゝそしひて折おりつる年としの内うちに

春はるは幾いく日もあらしと思おもへば

さて如何いかなる意味いみあつて、三月みづかづは彌生やよひといはれ

たるかは、彼かの清輔朝臣きよすけちそんが、三月みづかづ風雨かぜあめあたらまり

て、草木いよ／＼生ふる故にいやおひ月といふを
訛れり」と考へたるを初めとして、森宮龍翁の惠
美須草に「三月をやよひと稱ふるは、彌生と云ふ
意にて、春風の氣を以て、山木草ともにいや生ふ
る時なれば、いやおひ月と云ふを略して、やよひ
といふ云々」といひ、本居宣長先生が「凡て月日
の名ども、昔より説どもあれど、皆わろし。(生考
ふるに、皆わろしといふは酷に過ぐ)其中にたゞ
三月を彌生なりといふ類のみはよし云々」と言は
れたるを見ても、其の語意の疑ふ所なきを知る。
終に臨んで、彌生の異名の歌にあらはれたる面
白き三四を記せば、

夢見月(後頼朝臣)

櫻ちるはつもの山の夢見月

あらしの花の雪のなかやと

花見月(後鳥羽院御製)

薄みどり空もひとつの花見月

なべて心もあくかれぬらむ

櫻月(定家朝臣)

なべていま盛とみにて櫻月

うすくもりなる四方の山のは

春惜月(家隆朝臣)

數ならぬ身とも思はず日をかさね

くれゆくころの春惜月

歸省日記

小林雨峰

ふらりとわが僑居を出て、郷里古河に歸りしは
都の空雪いたく降りいでし、立春の前三日と云ふ

の日なりき、凍れるが如き雲は愈々雪を融して、夜に入りて尙ほ深く降りしき、朝まだき障子明くれば一面の銀世界、小さき庭先きに十文字に枝を横たへし梅の梢に漸く蕾を破りし紅梅の葩、眞白き中に麗はしう咲きたるが疎らに點するけはひのすぐれて眼に入りぬ、雪の梢に散りて僅かばかりうす綿の如きを纏ひたらんが如くになりては更らにもうれしく、小鳥來りて梢を搖かせは彼方は方の雪はさらにこぼれぬめり、かくても花のみ鮮かに笑ふが如くにて、一片だに落ちず、剛情なるうちに梅の精のしるく見えて顔、手寒うなるも厭はで眺め入りぬ、

節分の夜に撒豆を爲す、われは年男となりてとすゝめられつ、「福は外鬼は外」と大聲に呼ばりしに姪なるとみ女「福も外鬼も外だと可笑ねー」

と妙な顔をしてわが顔を覗く、「福も鬼もいらなからさ」と答ふれば「可笑いんだねー」と今度わ母の方を向く、われは廿八粒、とみ女十二粒をつまみて、ぼり／＼と噛み、われ小人島に福の神か鬼千疋をつれていつて、戦する話しを爲せしに、とみ女は嬉がつて笑ふ、愚にもつかぬとなれども故園の樂みはかくの如きところにあると思はれ、興いよく深くなりぬ、

心あしかりしは隣り裏に住む、慾張り婆と其の養女とのいさかひなりき、其對話はいと滑稽なりと云はんかたよろしかるべき、

「そんなにおれが邪魔なら、さつさとどうにでも形付けてしまへ、婆の言なり、

「おれには、そんな權利はねい黙つていやがれ」

養女の言

喧嘩は二日とつゝさぬ、婆なる人には立派(？)の息子ありて、一家を爲しつゝあるに、婆なる老母は勝手に家出して養女と別居し居るなり、而かもまた養女には別に若き夫あるなり、さるにてもこのとき其の夫はこの喧嘩を見て居りて一言たになし。夫婦も夫婦だなり、親子も親子だなり、あゝ手がつけれぬと啣しはそこの下女の獨語なりき、

うれしかりしは、わが家の前隣の指物師の家庭なりき、主人は職人の事なれば、文字なきは定小遣帳を小便帳とかいて済まして居るなれども、召し使ふ四人の職人との間の温きとは他にも稀なるべし、舊暮のとなりとか、

いかにも不景氣にて、主人夫婦それとは顔色にはいださねど。商賣のいかにも不景氣にて困じ果

つゝあるを見て、職人どもは皆何れも年こそ若けれ、主人ありてかくも奉公しきたりたるなればいまこそ忠義だてすべき時なれとや思ひけむ、十七八ばかり年かさなるが三人のものに相談しつゝ互ひに暇を貰うて家に歸らんはいかにと、云ひ出て、遂に、釘なりに何か書き認め主人の許に差し出せしに、主人心よく讀み了り、涙を浮べて、かゝる心掛けにてはわれは心ろいかばかり嬉しきか知れず、さりながら、さればとてお前たちがこの節季に家に歸りたればとて、それにては親達も直ぐにも困るべく、またわれとて、そうさせて心地よき筈なし、と夫婦にて口を揃へて押し止め、自分たちは例令食べるものを減してなり、心配はかけぬゆゑ、稼いでくれと懇ろに訓し、やかて一二日過ぎて、正月の仕着せにと主人は心つかひし

て、股引を銘々に新調しやらんとて、足袋屋に誂へしに、足袋屋にては銘々の寸方を取りに來りぬ然るにこゝに、また四人の職人どもは、何とて前にすら、堅くつゝまやかにせではと心がけ居る折りとて、春のものなぞ頂きてはすまぬと、どうかよしてもらひたふ御座りますと斷りしも、主人はそはあまり堅すぎるとなり、かつ世間の手前もあればと言ひ含めて、うれしくも、初春を迎へたりとなん、

小さき村里、文字なき人ながらに、かくも家庭のあたゝかさあるに、われは深くも涙に咽びぬ、教育ある人々の家庭だに、これに及ばぬ家庭のいとも多からむ、さても世の進み開くると云ふなるところに、春たちかへらぬ、寒さ冷き胡沙吹く風の荒み狂ふが如きあるは、嘆きてもあまりあらず

や、

左の一篇は在米國伊藤せい子女史より會員野口幽香子女史へあてゝの通信を乞ふて登載したるものなり。

キングストリート幼稚園

(是は此園の名に非ず此街に在る故假に名付く) 何某なる人其子と共に旅行せし時、船の沈没にわひて子と共に死す、此幼稚園は其人の遺産を以て此二人の紀念にとて設けられたるなり。此地にては幼稚園は貧しき人の子供のためにとて設けたるものゝ如く、萬事慈善的性質を帯ぶ、故に食物等をも幼稚園にて與へて營養の不足を補ふ。

お茶の水幼稚園の遊嬉室を正方形にした位の室にて五組の幼兒を保育す。一組の兒數八人より十二人位まで。五尺に四尺許の卓子の縦横に線を引きたる物の周圍に各兒別々の椅子に倚る、私の行きさし時は話の時間なりしと見え、各組とも種々な

る話して居たり。間もなくピアノの合圖にて一組づゝ立上り、各自分の椅子を持ち、不整ながら列をして室の中央に記しある楕圓形の太き線に沿ふて椅子を置きて着席す。各組の保母も亦其中にまじる、此時までマ―チを弾し居りし保母長も席に着き、植物の種子より芽を出す話を實物に就てなす。(空き鑊にスポンジを入れ、何の種か分からざりしが小さき種子を蒔き水を十分にして暖き處に置きしと見え悉く芽を出せり) 夫より至兒の中心より十人許を中央に出し、種子から追々に芽を出す様を遊嬉にてする。芽の出た時外の兒六人許出で、水を注ぐまねをなす、此間外の兒は各此遊嬉の歌をピアノに合して唱ひ居るなり。

次に鳥が玉子よりかへりて成長する様を繪にて話す(尤室内に小鳥が飼つてある故實物にても

知りをもるなるべし) 此遊嬉をする時保母が三人出で、親鳥となり各三人許の兒即ち玉子を抱へる他の兒の唱ふにつれ卵かへりてひよ子となり次第に飛ぶ様を示す。

次にヤンが生れて成長する事を繪に就て話し、ヤンはよき子供なりしや否や等問ふ、凡ての談話中間答法による事勿論なり(此週間はヤンが磔刑に處せられて死し三日目に再生せりと云ひ傳ふる時なりき) 總ての合圖はピアノによれども、遊嬉の終り等には保母長が首にかけある器にてなす、此器はにつける製の三角の管にして、之れと同じ質の四五寸位の棒とをリボンにてつなぎ首にかけをり、必要に應じ其棒にて三角形を敲くと小さき時計の如き音を發す、此音にて兒童は席を出入す。是にて遊嬉を終り、始の如くにして各の場所に歸

る。これより後は各組別々の仕事を授く。

或組は上圖の如き(圖は略す)鳥をかいいた厚紙を各兒に渡して切りぬかせる。次の日か或はいつか是をまどらせると云ひぬたり。まどるに鉛筆を用ふ。此鉛筆は普通と異り、心ばかりにて、小さき筒に二三十本種々の色をとり合せて入れふき、各の求むるに應じて好みの色を渡す。折れて削つるせわなし。又或組は四寸に六寸位の畫紙二枚を二つ折りにし、二三分計の中の桃色のリボン長五寸計のと渡して綴ぢさしむ孔は既に明きをるなり。是も此日は是丈にてをはり、次の時鳥の巢に卵の三つ四つなる所や、是がかへつて雛子になる様や、成長してとぶ様等をかへせるなりといへり。又他の組にては是と同じ事なれど本は既に出來上りをり是に植物の種子より芽を出して追々繁殖する様

をばえがせぬたり。

極々幼稚の者は一組となり、彼の恩物の球をば卵とか鳥とか云ひてもてあそびぬたり。

保育は是丈にて止め、此幼稚園の臺所を見る。

中央に化學の實驗室にてもありそな長さテ-

ブルあり。是にはひかふとまへとに小さき引出し數個ありて、中に牛乳屋の用ふる如き罐と三寸に四寸位の布を三四枚合せたる布巾とあり、是は罐を火にかけて下す時に用ふるなり。罐には度を盛る、之は例へば米を一番目の筋まで入れ、水を二番目の筋まで入れよと命する便利の爲に設けしなりと。

此外一寸したクックをするに用なる物を備ふ。

テーブルの上にはオイルストーブ十數個あり、年長兒をして晝飯の時みやすす煮焼をさせる爲な

りといひぬたり。

晝飯は總て幼稚園にて供給す、時としては或兒の家より今日此兒の誕生日故、皆さんに上げて呉れとして食物を持ち來る事あり。

此日も(三月十八日)或兒の誕生日なりとして蜀黍を一升ほどもち來れり、晝飯の時いりて與ふるならん。臺所の次に浴室あり、小兒用浴器と洗面臺とあり、汚れをる兒は湯をつかはしてやる。

此處に一個の戸棚あり、藥器をかく一日一同看護婦見まはりて藥用せしむべきものには是を與ふ。

保母は前に保母長と云ひしが一人專任にて他のは保母練習生にて實地を練習しつゝあるなり。

保育時間は九時より二時まで。

保育室に沿へる廣き椽側の一隅に、高四尺間口

四尺奥行三尺許の小さき家あり、内に寢臺、椅子卓子等の家具を置き、人形を人と假定して普通の住宅の様に寫せり、此室内の事は一切兒童のなすにまかせ、保母は是を指導するのみなりと。

或組の保母已が組の兒を率ゐて外に行きしが、やがて此地の名産バナ、一袋を買ひてかへり來れり、晝の食事に用ふるなるべし。

此幼稚園の幼兒の種類は雜多にて、土人、白人日本人、支那人、雜種等なり。保母は日本人をば最よしといへり、何となれば土人は怠ける癖あり、白人はあまりに氣早にて落付ず、支那人はあまりに落付すぎて困る、獨日本人は中庸を得、仕事も怠らず、沈着なれども、グツグツせず手先も器用なりと云ひぬたり。



●女子高等師範學校

女子教育の發達に伴ひて

女教員の需要は日に益々多きを加ふるを以て、この急を救ふ爲め同校に於てはこれまで、私費國語漢文、地理歴史、家事の三專修科を置て年々卒業生を出し夫々地方に赴任せしめられしが、今回更に私費國語體操專修科を設置し、主として高等女學校等に於ける國語體操科の教員を養成せらるると云ふ、募集人員は三十名、入學志望者は品行方正身體健全にして、修業年限四ヶ年の官公立高等女學校卒業生、若くは之と同等の學力を有し、年

齡十七年以上三十年未滿にして夫を有せざるもの

由、本年三月二十日まで願書を差出さば四月

上旬試験の上入學を許可せらるべしといふ。▲同

校教諭藤堂忠次郎氏は久しく附屬高等女學校の教

授に熱心盡力せられしが、今回新設の兵庫縣明石

女子師範學校長に任ぜられ、先月二十三日を以て

當地を出發せられたり▲同校教授野口保興、岩川

友太郎の兩氏は女子教育視察の爲め先月中旬都、

大阪、三重、和歌山、兵庫、岐阜、岡山、廣島、

徳島、香川、愛媛の二府九縣へ出張を命ぜられた

り。

●各學校の開始と生徒募集 追々新學期の始ま

るにつけ、其他の各女學校は夫れ々入學生徒を

募集し、又新に開始するもの多し、其主なるもの

を擧ぐれば

●●●●●
▲東京府第一高等女學校 同校は本年四月より淺草七軒町の新校舎にて、授業開始の筈にて、本年募集の生徒は第一學年に約百二十名第二第三學年に各約八十名にして入學願書の差出期限は本月二十迄 入學試験は現校舎にて施行、其期日は左の如しとなり。

第一學年 三月三十日

第二學年 三月三十一日

第三學年 四月一日

但し試験初日は各學年とも午前七時に出校すべしとのこと。

▲日本女子大學校生徒募集 同校にては、本年四月新學期開始に付、家政、國文、英文の三學部各一年級、英文學部豫科一、二年級、并に附屬高等女學校一年級より五年級まで、各級に入學を許可するよし、申込期日は三月二十日なるが、申込の順序を以て入學を許可すべきに付、豫定人員に達すれば、期日内と雖ども願書を受付ざるこゝあるべしと云ふ。

▲日本淑女學校の創立 昨年以來本郷千駄木町に建築工事中なる日本淑女學校は、最早大部の工事も進行したるを以て、來る四月初旬開校すべしと云ふ。

▲東京女學校 鳥尾子爵の統轄に係る下谷黒門町の東京女學校は今回本郷區駒込千駄木町右田子爵邸内二千餘坪を借り受け、新築に着手したるが來る三月下旬には竣工の豫定にて、技藝專修科裁縫教員養成科、并に三ヶ年の研究をも併置する由。

▲愛敬女學校 赤坂檜町なる同校は、此程大改革を行ひ新たに

久保乾太郎氏校長となり講師を増聘し寄宿舎を設け、女生徒の入學を許す由。

▲體操學校女子部の認可 日本體育會體操學校にては、女子小學體操教師養成の目的を以て同校に女子部を設置したき旨申請中なりしが、此程文部大臣より認可せられたるに付き、愈四月一日より開始する豫定。

▲家事科講習會 家庭改善の先導者を養成し、兼ねて文部省檢定試験に應ずる者の、爲めに設けられたる成女學校内同會は、今回第二期生を募集し、二月一日より新學期を開く、授業時間は毎週十五時間以上なりと云ふ。

●大日本割烹學會 石井泰次郎氏主任として専ら盡力せらるゝ、京橋區鈴木町十一番地の同會は、愈隆盛の由なるが、その規則は左の如くなりと。

◎本教場は割烹學校假教場として本會所定の各學科を實修せしむるを以て目的とする

學科
本科 日用惣菜、諸菜切方、交際料理、茶事懷石、支那料理、西洋料理、儀式料理、創立仕方
別科 日用惣菜、茶事懷石、交際料理、支那料理、西洋料理、諸菜切方

◎補修科 本科卒業業者ノ爲ニ設ク學科ハ各

科ヲ通シテ又教授法及料理心得ヲ修學セシム

學 本科 一ケ年 毎日曜日 自午前九時一週一回
至午後二時
別科 一ケ年 毎金曜日 自午前十時一週一回
至午後三時
期 補科補 修學者ノ都合上學期ヲ定メス

◎各科共入學ノ時日ヨリ學期ヲ計算ス

學 本科 (束修金壹圓) 授業料 一ケ月 金壹圓
別科 (束修右同) 授業料 右同
費 補修科 授業料ヲ半額トス

◎各科共毎月第一授業日ニ納ムルモノトス

(實修ニ要スル原料費ハ各科共一ケ月約金壹圓内外トシ(是ヲ四回或ハ五回ニ分テ)授業ノ都度計算シテ次回ニ支拂フモノトス)

●新潟縣女子師範學校 同校にては久しき以前

より筒袖説ありたるも、體裁等に關シ異論あり、實行されざりしが、今回普通の筒袖に稍異なる筒

袖を製作し、去月二十五日より之を決定し、其の下に蝦茶袴を着用せしむと。

●留學生歸朝 文部省留學生として、米國に留學專ばら體操科の研究に従事せられし井口あぐり

女史は先月四日無事歸朝せられたり。女子の體育の兎角不振勝なる今日此頃、希くは同女史の歸朝によりて大に面目を改むるに至らんか▲同じく獨逸に留學を命ぜられ音楽研究に従事せられし幸田

幸子女史は先月廿日無事歸朝せらる。西洋音樂の益々隆盛を來せる折柄、我音樂界は更に幾層の發達を望むを得んか。

●府下瀧の川の康樂園 同園は本會員印東氏の經營に係るもの、盛んに西洋草花を栽培して顧客の需に應ずる由、目下春陽來復の好時節、爛熳たる諸種の草花は廣漠たる庭園に充滿して眩々許な

るべし。杖を瀧の川に曳く人は是非とも一覽の價値あらん。

本號記事輻輳のため、幾多の覺報事項を省略せり、讀者の諒せられんことを乞ふ。

相模通信

通信員 平岩 學洋

○女子講習會卒業式 豫

て御報知致し、候本縣高等女學校内に開設の第一回小學校教員養成の講習會は、昨年十二月末終了し、今日に至り候ては皆夫

れ、職務につきたる由、本縣の如き女教員の少き地に於ては實に悦ぶべき事に候、御序に御知ら

●禁酒學校 獨逸のフランクフルト、アン、マインに於ける禁酒學校では、最初三ヶ月間は學校の給費にて學生に酒を飲ませる、其より以後引き續きて飲む者は自辨させる様にして居る。此學校の信用は近來頗る大きくなつて、現に先般九百人の入學志望者があつた相だ。

七十四
せ申上候、全第二回講習生を募集し當年一月より開會致し候由目出度事に存じ候。

○裁縫と學問 我が地方におき候ては、女子の小學校に就學する割合は尋常科は比較的多く之れあり候へ共、高等科に至りては實に驚く程少數にて御座候、多き所にて三分の二、極く小き所に至りては二分の一位に候、此の如く就學の少き

原因は、父兄の女子教育に冷淡なるに候へ共、又一つには女子は學問は出來ずとも裁縫さへでき候へば不自由ないとか、或はよき家に嫁に行かるゝとかの爲めの如くに候、學校へ久しくわけなき候

てはお針の稽古にやられずとの考へを父兄は皆持ちをるやに考へられ候、其の故は學校の裁縫なる者が不完全なる事故と存じ候、田舎に於ては裁縫教師に乏しく候、殆ど至る所の學校皆無資格の教師許りに候、其の教員も多くは教育志想の少しもなき者に候故、裁縫教授の完全を望まれぬ所から自然父兄がかくなる考へを持ち候事と推察仕候、如何かして裁縫の良教師の養成方法を講じたしと我等日々思考する所に御座候、裁縫が國民教育を妨害すとは實に歎くに堪へざる事に御座候。

○小兒保育院

兼て諸君方は各新聞紙上に於て御承知の事と存じ候が、相州腰越の慈善家佐竹音次郎氏の設立に係る小兒保育院は、實に美舉に御座候小生も今日は其の院に身を寄せ候事に相成候間、何れ公務の餘暇詳細御報致すべく候(以上)

北海道通信

通信員

○札幌中學校の雪戰會 一月二十三日札幌中學校構内に開會、尾原校長を會長に職員及び生徒を總務審判接待風紀炊事新聞記者寫真隊等を組織し北軍東軍とに分ち、約二百名宛となし數回の戰鬥をなし、など近頃珍らしき盛會なりき。

○女子高等師範學校の入學試驗 一月十五日より十七日迄三日間、北海道教育會事務所なる假試驗場に舉行されしが、受験者は函館區高田テツ、札幌區村木ミヨ、同片倉イチの三名なりき。

○北海道壽都私立女學校の設立 壽都町大字大磯、土谷アサ外十名は有志の醜金を以て同地に壽都實業女學校を設立せんと今回道廳に認可を申請に及びたるが、同校の目的は裁縫家事の二科を主とし、地方女子の徳操を養成せんとするにあり、

修業年限本科三年補習科一ケ年なり。

○女子教育の景況 本道は一般に女子教育は進

歩せざりしが、漸々高等女學校の設立を見るに至り殊に客月下田歌子先生のはるく本道に來られ

て女子教育の爲めに諸所に講演などありてよりは、一層斯の道の隆盛を見るに至れり、尙笈を負

ふて東都に出でんとするもの續々たるは本道の爲めに慶賀すべきことなり。

○本道の氣候 入寒以來非常の暖氣にて例年に

比し平日五度乃至十度の高温を示したるが、大寒となりても正午の氣壓は七百六十三耗を示し、氣

温益々上昇し○下七度(華氏三度)三南東の微風あり雨天模様となり、頗る温氣にて平年の大寒當日

に比して四度(華氏七度)二の高温を示せり。

會報

第廿八常會

先月十四日午後一時二十分より華族女學校幼稚園に於て開會、女子高等師範學校教授下田次郎君の歐米幼稚園教育視察談及會員相互の隨意談話ありて午後四時開會せり出席者は凡七十名なりき。

入會の郡

- 京橋區築地二丁目朝海小學校
- 淺草區須賀町二
- 神奈川縣三浦郡豐島村中里二〇二
- 赤坂區青山南町二ノ四〇
- 本郷區弓町二ノ三四
- 神田區淡路町一ノ一
- 牛込區市谷加賀町二ノ十
- 牛込區市ヶ谷藥王寺前町七四
- 埼玉縣浦和町
- 淺草區千束町二丁目
- 岡山市
- 本郷區駒込動坂
- 石川縣高等女學校
- 同
- 和歌山縣師範學校
- 小原 尙美
- 鳥居 しげ子
- 高木 梅
- 石井 國次
- 古市 幸
- 十文字 こと
- 柴田 ちた
- 山田 やて
- 志村 みき
- 小關 すて
- 大賀 ふく
- 佐藤 都や
- 宇野 むつ
- 高桑 たま
- 會野 きくえ

女子高等師範學校附屬高等女學校

京橋區木挽町九ノ十八

長崎縣高等女學校

同

亦坂區丹後町一

山口縣山口高等女學校

和歌山縣東牟婁郡新宮町

大分縣大分高等女學校

同

富山縣高等女學校

富山縣師範學校附屬幼稚園

麴町區五番町十四番地

日向東白杵郡門川

信州上田新參町

札幌高等女學校

信州松本高等女學校

下谷車坂町一〇七番地

鹿兒島縣高等女學校

同

三田網町蛸須賀奥

同

長野縣松本高等女學校

同

戶野みつ

拔山つぎ

田島ます

木下やす

岩下さち子

德富藤

若林利治郎

岡田折枝

松岡久壽彌

生田すゝ

吉岡うた

加藤常子

久保やま子

脇野ついで

瀧澤みち

山川いく

築山督潮

菊地教世

波依谷三枝

太田とめ

内藤伊彌

清水よし

古谷くに

高島長江

長野縣松本高等女學校

同

同

同

同

岐阜縣大垣高等女學校

岩代國若松市私立會津女學校

靜岡縣師範學校女子部

和歌山縣師範學校

群馬縣女子師範學校

佐賀縣立高等女學校

山口縣周防國吉敷郡大内村

山口縣長門國厚狹郡小野村

山口縣周防國吉敷郡山口町道場門前天野内

同

山口縣山口高等女學校

轉居の部

山梨縣北巨摩郡葦崎町へ

神奈川縣鎌倉郡腰越小兒保育院内へ

麴町區五番町九嘉納方へ

熊本市鷹匠町二十一番地へ

牛込區南横町八十番地へ

房州安房郡西條村花房へ

多湖甲子生

勝村こま

黒田きん

胡桃澤田鶴

市川春代

吉川ふみ

吉野ふみ

鈴木きく

中尾幾重

小島龍

中條ひろ

岡本よし

今橋ひさ

田淵みす

三隅とも

馬詰武

保坂ふさ

平沼繁治

石川いし

大塚さだ

堀野てつ

吉野須賀

婦 人 と 子 と も の 第 三 卷 第 三 號

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|
| 一金一 | 一金五 | 一金四 | 一金四 | 一金四 | 一金四 | 一金四 | 一金四 | 一金五 | 一金四 | 一金一 | 一金六 | 一金五 | 一金五 | 一金一 | 一金十 | 一金十 | 一金六 | 一金一 |
| 圓 | 錢 | 錢 | 錢 | 錢 | 錢 | 錢 | 錢 | 錢 | 錢 | 圓 | 錢 | 錢 | 錢 | 圓 | 錢 | 錢 | 錢 | 圓 |
| 自三十五年十一月 | 自三十五年十一月 | 自三十五年十一月 | 自三十五年十一月 | 自三十五年十一月 | 自三十五年十一月 | 自三十五年十一月 | 自三十五年十一月 | 自三十五年十一月 | 自三十五年十一月 | 自三十五年十一月 | 自三十五年十一月 | 自三十五年十一月 | 自三十五年十一月 | 自三十五年十一月 | 自三十五年十一月 | 自三十五年十一月 | 自三十五年十一月 | 自三十五年十一月 |
| 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 |

會費預收 至二月二十六日

| | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|------|-----|-----|------|------|-----|------|------|------|-------|------|------|------|-----|------|-----|-----|
| 松岡みち | 中島みつ | 松岡幸 | 小島ま | 重田ふじ | 平塚さよ | 野崎よ | 藤宗きく | 坂本あき | 寺島とく | 御園生よそ | 鈴木重子 | 井上たつ | 保坂ふさ | 堺さき | 新兎義勇 | 古田重 | 田邊春 |
|------|------|-----|-----|------|------|-----|------|------|------|-------|------|------|------|-----|------|-----|-----|

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 一金三 | 一金六 | 一金五 | 一金五 | 一金六 | 一金六 | 一金六 | 一金五 | 一金一 | 一金三 | 一金一 | 一金五 | 一金二 | 一金六 | 一金一圓四十錢 | 一金一 | 一金三 | 一金五 | 一金六 | 一金六 |
| 錢 | 錢 | 錢 | 錢 | 錢 | 錢 | 錢 | 錢 | 圓 | 圓 | 圓 | 錢 | 圓 | 圓 | 錢 | 圓 | 錢 | 錢 | 錢 | 錢 |
| 自三十六年五月 | 自三十六年五月 | 自三十六年五月 | 自三十六年五月 | 自三十六年五月 | 自三十六年五月 | 自三十六年五月 | 自三十六年五月 | 自三十六年五月 | 自三十六年五月 | 自三十六年五月 | 自三十六年五月 | 自三十六年五月 | 自三十六年五月 | 自三十六年五月 | 自三十六年五月 | 自三十六年五月 | 自三十六年五月 | 自三十六年五月 | 自三十六年五月 |
| 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 | 月 |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|-------|------|------|------|------|-----|-----|------|-------|-------|------|------|------|----|------|------|------|------|------|
| 吉田しう | 岩下さち子 | 若林みつ | 星野わか | 永田らく | 吉田はる | 蘭田梅 | 近藤茂 | 江藤みほ | タツヒング | 波多野とく | 建部よね | 大村よね | 相賀よし | 關す | 野村ぎん | 儀俄小み | 西浦りつ | 淺田つる | 武藤うめ |
|------|-------|------|------|------|------|-----|-----|------|-------|-------|------|------|------|----|------|------|------|------|------|

會 告

來る四月二十一日例年の通り本會總會相
開き申すべく候に付いては會場陳列品と
して左記の品々開會前日までに御送附之
程願ひ上げ候

- 一、幼兒成績品
- 一、幼稚園參考品
- 一、幼兒保育參考品

其 他

三月五日

フレーベル會

謹 告

會務整理の都合之あり會費
御延納の方は至急當會あて
御郵送下されたく候

御入會企望の方は會則御承
知の上にて直接本會へ御申
し込み相なりたく候。尙會員
諸君にはなるべく入會者を
御紹介せられんと希望致し
候

フレーベル會規則

- 第一條 本會ハ幼兒保育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- 第二條 本會ハフレーベル會ト稱シ東京ニ置ケ
- 第三條 會員タラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼兒保育ニ篤志ナルモノニシテ會員ノ紹介ヲ經ベシ
- 第四條 會員ハ本會ノ經費トシテ一ヶ月金拾錢ヲ騰出スベシ
- 第五條 令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルモノハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルベシ
- 第六條 本會ノ目的ヲ達センガ爲ニ左ノ事業ヲ行フ
 - 一 總會 毎年四月二十一日之ヲ開キ保育ニ關スル演說、談話、保育參列品幼兒成績物展覽會、會務ノ報告、幹事ノ選舉等ヲナス
 - 一 會日ハ會長ノ意見ニヨリ之ヲ變更スルコトアルベシ
 - 一 常會 毎年二月、六月、十月、十二月ノ第一土曜日之ヲ開キ保育ニ關スル演說、談話、協議、實驗等ヲナス
 - 一 組合會 會員中特ニ或ル事項ヲ研究セントスル者ヲ以テ組織ス但シ別ニ組合會規約ヲ定メテ會長ノ承認ヲ經ルモノトス
 - 一 雜誌發行 毎月一回雜誌ヲ刊行シ之ヲ會員ニ配布ス
 - 一 前項ノ外本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件
- 第七條 本會ニ左ノ役員ヲ置ケ
 - 會長 一人 會務ヲ總理ス
 - 主幹 一人 會長ヲ補佐シテ會務ヲ掌理ス
 - 幹事 十人 會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス
 - 評議員 若干人 重要ナル事件ニ關シ會長ノ諮詢ニ應ス
- 第八條 會長ハ客員中ヨリ推薦スルモノトス
- 第九條 主幹ハ會長ノ特選トス
- 第十條 幹事ハ會員ノ互選トシ其任期ヲ二ケ年トス但シ毎年半數ヲ改選スルモノトス
- 第十一條 評議員ハ會長ノ特選トス
- 第十二條 本會ハ必要ニ應シ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ルトコトアルベシ
- 第十三條 此規則ハ會員三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラサレハ變更スルコトヲ得ス

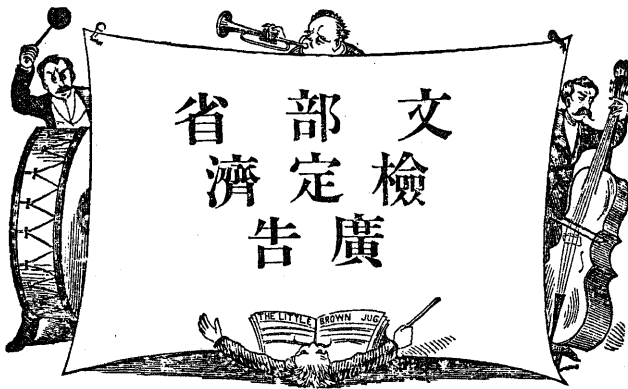
今般當校ニ於テ私費國語體操專修科ヲ設置シ生徒三十名ヲ募集ス入學志願者ハ來三月二十日マデニ願出ヅベシ尙詳細ハ二月五、六日ノ官報廣告欄若クハ當校ニ就キ承知スベシ

明治三十六年二月

女子高等師範學校



明治三十四年二月廿八日
 第三種郵便物許可



空前の唱歌良教科書！
 檢定済生徒用唱歌教科書の嚆矢
 文部省檢定済

唱歌教科書

郵税一冊に就き金四錢

| 教師用 | 生徒用 |
|-----------|-----------|
| 全四冊 | 全四冊 |
| 第一卷定價金三十錢 | 第一卷定價金三十錢 |
| 第二卷定價金三十錢 | 第二卷定價金三十錢 |
| 第三卷定價金三十錢 | 第三卷定價金三十錢 |
| 第四卷定價金三十錢 | 第四卷定價金三十錢 |

發行以來唯一の完全なる唱歌教科書と
 して非常なる大喝采
 を博し僅々數月に會
 三版發行は今其
 生徒用教師用共に
 部省の檢定を経て更
 らに其眞價を發揮す
 從の榮を得たり
 して來世に刊行せし
 歌集は皆悉く教師用
 即ち許可せられたる
 のみにして生徒用即
 ち眞の教科書とし
 は實に本書が如何に
 り以て本書か最完全
 該科の教授上を完
 なる良書たるかを知
 るに足るべし

●洋琴 金參百圓以上 各種

●ウワイオリン 金五圓以上五拾圓迄 各種

●鈴木製 船來品 八圓以上百五拾圓迄 各種

●樂隊用樂器

大太鼓金貳拾圓以上 小太鼓八圓半以上 シンバル 金四圓以上 其他バス、バットン、テナリ、アルト、コルネット、トロンボン等 金貳拾圓以上 百六拾圓迄

●鼓隊用樂器

太鼓金貳拾圓以上 横笛金壹圓以上
 ○學校用一組拾參圓

●手風琴 金貳圓五拾錢以上 參拾圓迄 各種

●保險 附 山葉風琴 定價金拾六圓五拾錢 以上金貳百圓迄

○右の外兩用風琴、吹奏琴、ハーモニカ、フラジヨレット其他各樂器並に和洋音樂附屬品各種

●ピアノ 調律修繕

●郵券貳錢 御送附目錄進呈

(ヨキ號略信電)

番九廿百五橋新話電

店器樂社商益共

區橋京市京東 地番三十町川竹